川柳の雑誌

麻生路郎・主宰

大正十二年三月廿一日第三種郵便物認可
昭和十七年六月一日發行（第十九卷第六號）（毎月一回一日發行）

六月號

Pensoj flugas trans la land-limon

ニキビ

りとびきに

美顔水

蚤・蚊・南京虫等の
毒虫で カユい時！

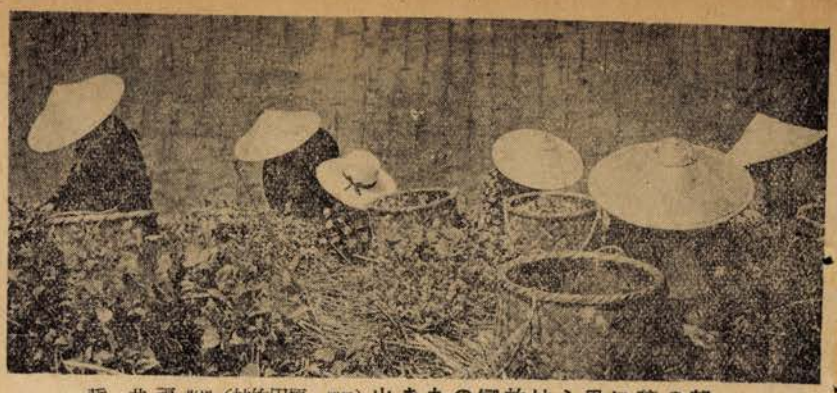
然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

★ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の薬です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧！ ゼヒお勧したい薬です！

是	吹	ニ
非	出	キ
此	物	ビ
薬	に	・

東京・大阪

桃谷順天館



朝の茨に思ふ故郷はふ丸き山（岡靜・榎田竹林）　影撮　福井哲

首相と微行

東條首相が、單騎背廣姿で魚河岸にあらはれたことがあつた。それは朝飯前の民情視察であつたのであらうが、首相の顏が映畫その他で賣れすぎてゐるので、人氣をあほつた以外、實際的な効果は尠なかつたであらうと思はれる。

○

最近又、ある配給所へ立寄り練炭が山積されてゐるのを見て、附近の老婆に配給狀態をただされたといふ新聞記事を見た。幾つからだがあつても足りない忙しさの中から絕えず斯うした心遣ひをされてゐる首相を持つことは、まことに有難いことだと思つた。

○

私は近衞さんが首相をしてゐられるころに近衞さんにとつて、尤も必要なものは民情視察ではなからうかと思つてゐた一人であつた。尤も私のいふ民情視察といふのは鳴物入りの視察でなく、北條時賴や德川光圀の故智にならつた視察がのぞましかつたのである。變相と微行によらない限りは民衆の眞の聲は到底聽けるものではないからである

○

笹川代議士が「これからの議員は東京と大阪、自宅と議事堂だけを知る人であつてはならない」と云つてゐるのは、從來の議員の多くが、自宅と議事堂しか知らなかつた議員であることを物語つてゐるものと解釋してもいゝのである。もつと惡質なのになると、くにうやだんご取りのやうな感じしか與へない代議士だつたのである。

私に

春の草代議士なりとに踏まれるな

と云ふ句があつたことは這般の消息を物語つてゐるのである。

○

首相の心構へもうれしいし、笹川代議士の聲も實質議員らしい心がけとして素直にうけとれるが、あまりに顏が賣れすぎてゐるので、そこには變裝と微行といふ手段で、肩書をかなぐり捨てた一個の人間としてひそかなる行動によつて、眞の民情を知ることの努力がのぞましいのである。代議士の眞の實質は斯くしてこそ鐵壁の陣營となるであらうし、首相への信賴は斯くしてこそ千金の重さを加へることであらうと思ふ。

○

日支事變勃發後、戰線を知らぬ大臣の多いことを慨歎させられてゐたし、飛行機で戰線を馳驅し得ない首相や大臣を齒痒ゆく思つてゐたが、東條英機首相によつて、この渴を醫せられたことは大東亞指導の重責を擔ふ皇國日本の首相として餘りに當然のことではあらうが、まことに有難いことだと云はねばならない。

○

首相がみなければ、決定し得ぬ重大な事項の山積してゐることは百も承知してゐるが、つゞさに民情を知る以外には政治の眞の生命はない筈である。首相の變相と微行に於て新聞記者を出しぬくことはハワイ眞珠灣の奇襲以上の効果ともならうし、それこそ眞に實質政治への畫龍點睛であらうことを信じて疑はない　（路郎）

不朽洞句抄

麻生路郎

親からの小賣の符牒
忘れやう

轉業か藏貸しますと
北船場

暖簾への別れ佛間に
灯を點し

オメ〳〵と俘虜はお化
粧などもして

爆音へ樹々は綠にし
たたれる

川柳雜誌　六月號目次

表紙（土產店）福井哲撮影……麻生路郎…（一）
首相と微行……麻生路郎…（一）
川柳寫眞（茶摘み）カメラ福井哲・句—榎田竹林（一）
川柳の近畿　大和篇（四）……麻生路郎…（二）
堺の史蹟を覗く……小山文三…（二）
武玉川五篇研究（一）……梅本森蛭子　摩山東魚省二…（一〇）
東京放語（る・ふ・ふ・が・あ・で・ん）福田山雨樓…（一二）
初等川柳講座（五）……麻生路郎…（一二）
斷斷語（る・ふ・ふ・が・あ・で・ん）和泉生…（一四）
川柳世界史（一四）……戶田孤蓬…（九）
隨筆三題（る・ふ・ふ・が・あ・で・ん）小山文三…（一五）
月評　足跡（る・ふ・ふ・が・あ・で・ん）路郎・馥乃　冬秋・丹路…（一四）
私の昔の川柳に現はれた日本刀（る・ふ・ふ・が・あ・で・ん）奧村丹路…（一五）
鷄卵事件（る・ふ・ふ・が・あ・で・ん）前田五健…（一六）
日本は廣し（る・ふ・ふ・が・あ・で・ん）長野文庫…（一五）
田邊由布…（一五）
★
不朽洞句抄……麻生路郎…（一）
近作柳樹……麻生路郎選…（一六）
川柳塔……麻生路郎選…（一四）
同舟近詠……諸家…（一〇）
一路一釘集　獨身……西田嶂樂選…（一〇）
各地柳壇……多田市多機選…（一〇）
川協・柳界展望……（一六）　七號室雜記…（一一）
社關係の人々……（一六）
川柳類題索引……（一〇）

川柳の近畿

大和篇（四）

麻生路郎

（七）飛鳥

★耳成山の南、多武峰の西稻淵の北、畝傍山の東一帶の地を飛鳥地方と呼んでゐるがその中心地は飛鳥村の飛鳥である。

★履中天皇が御即位前に、難をさけて難波から大和へ入らせられたことがあつた。その時御途すがら大坂の山口（いまの二上山の西麓）で宴をお開きになり『明日大和へ進まう』と仰せられた。それでその地を『近飛鳥』と名づけ、大和の方に『遠飛鳥』といふ地名が起つたのであるとのこと、『飛鳥』と書くのは飛ぶ鳥のアスカといふ枕言葉をアスカと訓んだもののやうで、『明日香』とも書いてゐる。

★甘樫橋の東詰に、飛鳥の村役場と國民學校があるが、ここが飛鳥淨見原宮址である。飛鳥村は東西に長い。その東の端の鳥形山に飛鳥坐神社があり、民家の南裏に飛鳥大佛で名高い飛鳥寺がある。

★飛鳥を詠んだ今人の句。

飛鳥路あの山々も二千年　路郎

飛鳥村もの賣る家の霞むとこ　同

夢の夢の夢へ續くも飛鳥路　同

（八）向原寺

★向原寺（豐浦寺址）は飛鳥村豐浦といふところにある。欽明天皇の時に、百濟の聖明王から始めて佛像を献じて來たので、諸官臣と評議し給うたところ、蘇我稻目は崇佛を、物部尾興と中臣鎌子との二人は排佛を奉答したのでその結果、蘇我稻目に賜はつた。稻目は向原の里にある自分の家を寺として朝夕禮拜した。これが佛教傳來の物語でつまり向原寺が我國最古の佛寺だが、たま〳〵惡疫が流行したので、反對派の物部氏のために燒拂はれ、佛像は難波の堀江に投げ棄てられたと日本書記に記るされてゐる。

★寺址には太子山向原寺（廣嚴寺）といふ眞宗本願寺末の小寺が建つてゐる。信州善光寺の如來は當寺の本尊であつたので、元善光寺とも呼ばれてゐる。

★推古天皇即位八年に信濃の國主が都に上つたことがある。その時伊那郡譽田の里の善光を伴はれたが、公役の終つた善光が難波の堀江を通つたところ、水中から善光々々と呼ばれたので、善光が水面を見ると一光三尊の御佛であつたので、難波の池から抱きあげ、傍らにあるすすぎの瀧で淨めて、晝は善光が阿彌陀如來を負ひ、夜は如來が善光を負うて、遙々信濃へ歸つたのが善光寺の緣起で、それを詠んだ古川柳に

善光も木佛ならばうつちやる氣

善光に請出されたる流れの身

二菩薩は歩かつしやいと本田言ひ

晝背中夜は善光腹が冷え

などがある。

★當寺が、向原寺又は豐浦寺の後身だとすると元は境内であつたのか字に寺内、その字の中に金堂といふ小字がある。なんばの池と稱する池やすすぎの瀧といふのも附近にある。又礎石なども遺つてゐていかにも大寺址であることを偲ばされる。

★ここに因んだ今人の句を擧げると、

神罰もこはし佛の顏もよし　孤篷

難波池はあこれかと二三人　某人

かぶれてるやうに稻目はあざけられ　路郎

み佛を感じ稻目のあほぐ月　同

そのままに信じすすぎの瀧の水　同

（九）飛鳥川

★飛鳥川は飛鳥村を南から北へ流れて、大和川に合流してゐる小川である。その流域がよく變遷したと見へ、世事の反覆常なきに喩へられ『世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵はけふの瀨となる』といふ古歌で名高い。

★飛鳥川を詠んだ今人の川柳では

飛鳥川かはる淵瀨を知らぬ蘇我　葭乃

あすか川これかと思ふ川の幅　路郎

飛鳥川指さすとこに宮の址　同

カメラマンけふは瀨に立ち淵にたち　同

（10）雷丘

★雷丘は向原寺から○・二粁ほどのところで、飛鳥川を隔てゝ甘樫丘と向ひ合つてゐる。昔、飛鳥神社をこの丘に祀つて『飛鳥の甘南備山』と呼んでゐた。

柿本人麿は

皇は神にしませば天雲の雷の上にいほりするかも（萬葉集）

と詠んでゐる。

又『日本靈異記』によると雄略天皇の御代に、小子部蜾蠃が、この丘の上で雷を捕へたといふ傳說があるが、『日本記』では、三諸岳で長さ七丈餘の大蛇を捕へたことになつてゐる。

★雷丘を詠んだ今人の句を左に掲げやう。

つかまへたもののすがるはもて餘し　某人

雷も昔は素手で捉へられ　波夢造

桑原と云ひ〳〵渡る飛鳥川　馥乃

(二) 甘檮丘

★甘檮丘は向原寺の南方にある丘で、飛鳥川を隔てて雷丘と向ひ合つてゐる。甘檮を味檮とも甘白檮とも書いてゐる。附近に甘檮神社がある。

★蘇我蝦夷とその子の入鹿が皇極天皇の二年に、甘檮丘に邸宅を構へ、大臣家と云ひ蝦夷の家を宮門と稱へ、入鹿の家を谷宮門と稱へたと日本書記に記るされてある。

★又甘檮丘は正邪判定をする探湯のことで有名である。探湯といふのは神盟に誓つて手で熱湯を探らし、傷かない者を正、傷いた者を邪と定めたのである。應神天皇の九年に、武内宿禰の弟の甘内が宿禰のことを天皇に讒奏した時に、磯城川の濱で探湯をさせたことがあるし、允恭天皇の御代に、天下の姓氏を亂す者が多かつたので、この甘檮丘で探湯が行はれたと傳へられる。

★甘檮丘と探湯を詠んだ今人の句では

こつそりと油をぬつた手も交り　孤蓬

手をみつめ心をみつめ順を待ち　同

甘檮が丘やけどした者も居て　某人

戎谷(蝦夷谷)思ひ上つた人が住み　同

飛鳥大佛(安居院)

(三) 飛鳥寺

★飛鳥寺は雷丘から〇・三粁のところにある。飛鳥大佛又は飛鳥の安居院と稱へられ今は眞言宗に屬し、壺坂寺の末寺となつてゐる。荒廢して今では一小寺に過ぎないけれど飛鳥時代の丈六佛像を存してゐるので有名である。

★崇峻天皇の御代から推古天皇の御代にかけて、聖德太子と蘇我馬子と計つて佛法興隆のために創建せられた寺院で大官大寺、川原寺と共に飛鳥三大寺の隨一に數へられ、その東門には飛鳥寺、西門には法興寺、南門には元興寺、北門には法滿寺の扁額を掲げ佛法弘通の根本寺であつたのである。しかし和銅三年、平城京の新興で、新京即ち平城京の左京に遷されたので(寺號のみの移遷)新京の元興寺に對して當寺は本元興寺と稱へられることになり久しく盛大を極めてゐたが時勢の變轉と共に寺運が傾き、今では僧坊の一つであつた安居院にその名殘りをとどめてゐるのである。

★本尊は推古天皇の十三年に有名な鳥佛師が勅命によつて造顯された金銅の丈六佛像である。數次の火災で甚だしく破損し後代の補修をうけてゐる箇所も少なくないが、我が國最古の佛像である。

★この寺が盛大であつたころには境内に槻の樹の立つた廣場があつたらしい。中大兄皇子に中臣鎌足が近づく機會が出來たといふ打毬の現場である。日本書記には打毬の文字が明記されてゐるのに、いつのころにか、それをクヱマリ(蹴鞠)と訓み、くつが脱げたのは蹴鞠に限るやうになつてゐるが、文字は打毬で、つまり今日のゴルフの如きものである。舞樂に打毬樂があり繪卷にも打毬が描かれてゐるところから見ても蹴鞠ではなく、打毬であらうと云はれてゐる。

★皮肉なことには蘇我馬子が創立したこの寺で僅かに五十年經つかたないうちに蘇我氏滅亡の端緒が開けたことである。いつの世に於ても奢る者は久しからずである。寺の西方、田圃の中に蘇我蝦夷の首塚がある。

★飛鳥寺を詠んだ今人の川柳を左に、

どの邊へ沓が落ちたか飛鳥寺　某人

飛鳥寺ごちや〳〵〳〵と札を立て　同

一棟は無駄な白さの飛鳥寺　同

田の中にうつ向き勝ちに蝦夷塚　同

花吹雪寓居にしたい飛鳥寺　馥乃

鎌足へあつらい向きに沓が脱げ　路郎

大それた鎌足さんと女いひ　同

むかしむかしの明日香にちりし櫻散る　同

川柳塔

=路郎選=

人間も鳩も京都は手をつなぎ
教科書を買ふ母親のガンバツな
天平の佛の前の魔法瓶

大阪府高石町　戸田孤篷

兵庫縣川西町　戸倉普天

女事務氣質

お茶飲みに畫出られんので辭めるとサ
別嬪に「デモ下品さ」と難をつけ
孫抱いた寫眞撮らせて悦に入り
農村に婦道とおはぐろまだ殘り
煙草屋を看板にして日歩を貸し
大戰果、警報位、我慢しや
配給のある度、菓子を供へてる

大阪府高石町　米本貴志子

日の丸へ敵の敗將目をそらし
人形と話して居たり春の宵

尼崎　水谷鮎美

屋臺店十圓紙幣に驚ろかず
尺八をふく友銀の月の下
豆の葉の母をおもはぬ日とてなき
なあかのなーかの小坊んさん陽がまはり
足並をそろへて犬に吠えつかれ
縫紋の羽織へ妻のすこし老け
温室に終る青年とは見えず

柳友酒井斗風君病篤し（三句）

頰髭の濃く唇のやゝうごき
君の瞳に枕のサヤが白ろすぎる
笑はせて歸る言葉の寂びしすぎ

大阪　橋本綠雨

ステージをまねる板の間叱られる
浦島と寶船とがたんと出來
退けてから男やりこめたをほこらげに
アラの出ぬ先に轉勤して終ひ

横濱　福田山雨樓

一等車山田耕筰氏の頭
天長節東を拜しまきを割る

代議士總選擧

投票所士農工商と云つた顏

長男に面會

面會日上等兵の子と歩き

尼崎　奥村丹路

おそろしさ今年もすでに四月すぎ
路傍に繪をかく人を美むよ
待つてゐた春知らぬ間に逃げてゆき
子は神の如し或は泣きやまず
土塀ある風景いゝな村に入り
敵機空襲五羽の鷄舍も水を置き
人情に或日つまづく配給所
大阪市南區生れ今もゐる
寢ころんで雜誌みるほど女墮ち

美しきに如かず子の鼻つまんどき
耳かきはどこへ行つたか日曜日
借り傘の破れ傘さして戻りぬ
しあはせと言はむ廊下の光る家
縁あつてかくは侍く女の身
雨降りぬ終日降りぬ腹も立たず
床の間に軸なし下宿ひそと暮れ
清貧の朝晝晩と齒をみがき

戸屋　寺井鋭々

米機本土來襲忽ち空襲又は退散

猪口才な雀が鶯の眞似しよる
哲學は哲學流れる水は水
子の靴も朝だけきつちり並んでゐ
牡丹散つては紙切の如し見返らず
鯉幟大きい兄は戰地です
タイプ打つ硝子の外は春の町
バーなどへ來る人でないと女給いふ
女秘書に蔑まれてる社長だが
ツーピース夏手袋のまゝ握手
美人ちと大きい鼻に汗をかき
骨董屋店の火鉢も賣るつもり
うるさいので委員にすれば顔出さず
茶の淹れ方それから小言續く也
飯時へあつかましいのが來て座り
砂埃の中であんまき賣り切れる
主人けふ磨かぬ方の靴出させ
ルンペンの大法螺孔雀も飼ひました
父となる顔で產院の廊下行く

大阪　武部　香林坊

骨拾ふ約束がふと見放され
エトランゼへ女中は別な用が出來
父となり母となる日へ氣を使ひ

布施　上田翠光

淋しさは笑顔の無さを喝破され
仕返しを考へるだけ負けて居た
兩眼の泪無情への抗議

津山　河田一將

診察場風景（二句）

さうと聞き田舍に行かうかとたづね
一寸ない病氣と聞かせ庸醫なり

大阪　井上湧三

健民運動始まる

春眠へもう健民の靴が鳴り
春の筍追つかけあふてけふも伸び
いゝ度胸みせて蛙はうづくまり
戰果またラツシユアワーの中で知り
小走つて手を貸す母の姿よし
子を抱いた父へ座席がありませぬ

大阪　八竹正柳

自家用の煙の後を歩かされ
恐怖もて髮の變化を見守りぬ
責任を以つてと嫌な言葉聞く
練習機ハイカーの頭上すれ〳〵に
賢いねをもう聞き入れぬ智慧がつき

美術展にて

この他は想像されよといふ畫にて
終電車車掌は勘定初めかけ
賣る本を抱えて五月雨にぬれ
風邪らしい咳を葬儀の中に聞き
子にかこつけて妻食べて來る
インキ壺男女並ぶといふ姿

京都　明石柳次

散髪屋の鏡の中も初夏となり
ばた〳〵と告別式がしまはれる
廢業の矢張り髪に櫛をあて　奉天　吉田水車

一つ一つの彈にたましひある如し
チャーチルは好きな葉卷もふと忘れ
職域へ鐵條網はなかりけり
旅の宿しやうことなしに雨を賞め　大阪　須崎豆秋

こゝまでは借金とりも來ぬ櫻
新綠が滴たつてゐる乞食小屋
囚人を運ぶガソリンなども要り　松本　石曾根民郎

續々弟を弔ふ

たそがれに板書いそしむ膝なりし
天井の高さ柩は横はり
はるの夜は汝が部屋に來て聲を呑む
もの言はず母の白髪は通夜のうち
美しき死へはらからの夢多く　大阪　正本水客

利子天引都會の隅に疲れてゐ
いゝ酒をのましムツツリ板場にゐ
建國のそのまんまなる松の音
表情のない花嫁でそれでよし　豐中　黑川紫香

間道を拔ければ若い僧と會ひ
ズタイルブツク肉付きのいゝ手でめくり
義理難き男の和服よく似合ひ
春深し麥の實りを汽車がゆく
貯めてゐる課長將棋も知らぬなり　大阪　丸尾潮花

戰へる國とも見えず寫生の子
もう泡のたゝぬビールを呑んで寢る

見送つてしもて波止場の灯にしやがみ
燒香へただ泣きじやくるのも女
兄弟がおなじ酒場の灯に出合ひ
忘れたい人の名字を又見つけ　大阪　北川春巢

清貧の時局の波によう乘らず
結跏趺坐明日征く人と思はれず

東北の旅回顧（二句）

公用の鞄へ趣味のものも入れ
モンペイの本場成程よく似合ひ
卵の殼もつてこいとは鶏言はず
櫻餅一人はごろり横に寢て
靈柩車の階級、松竹梅とあり
保險だつかと相手仲々慣れてゐる　大阪　西尾栞

財政は二つ夫婦の氣も二つ
召され夫の益々太き一の眉
一〇〇圓也朝露の如き一しづく
多忙に付御無沙汰申候箱根より
九勇士賴山陽は居らざるか　下關　櫻川不水

献金をしたいと思ふ日を過し
片言を聞いてる方は眼を細め
腰低う出て來る男世事にたけ
見學へ產業戰士振り向かず
一票を清く投じた足となり　廣島　濱田久米雄

いさをしは天下晴れての松葉杖
轉業を覺悟してからよく儲け
自爆する機首は故國の方へ向け
目がこえた事が結局不倖　大阪　菊澤小松園

隼の異名はあれど貧乏な　大阪　清水史路

長期戰わたし生涯捕虜ですか　本土初空襲

撃墜の報らせ脚絆を卷きかへる　ガンヂー翁嘆く

狙はれてゐるはおまへさ退いとくれ　選擧

一票へやはり着がへて行きまつさ

許された列の尻尾へ僕も立ち　西宮　西川愁水

鼻唄のリズムへ青い空と雲

缺勤屆スキーに行つたとは言へず　大阪　中内翠芳

お守りが二つに割れた事故が有り

迷ひ子は何を問ふともアツチから

歌やがて喧嘩となつて座がしらけ　下關　多田市多樓

世に勝つてまた世に負けて共稼ぎ

行く人の素足の塵も春のもの

まどろめば夢は故郷をまださらず　四月十一日印英決裂

クリツプス悪の報ひを知つて去に　四月十八日京濱地方へ敵機襲來

來ることは來たけど馳走喰べず去に　佛印　大森風來子

經理巡視隨行

先頭は鰐を見つけた聲になり

そよ風に乘つて猿さん枝を變へ　岡山　逸見灯竿

教卓の上にも事務が待ちわびる

親馬鹿の話を聞いて教師去に

戰線に負けるものかと隣組

じんけんに負けて壽命を縮めけり

珊瑚海敵機へ牡蠣の呆れたる　大阪　夷一笑

國寶の城の眞下の花吹雪

兵隊と向ひ合せの三等車

人絹の旗で武運を祈られる

氣ちがひとうまを合せてこわくなり

受賣の話上手な男にて

玄關へ出たは女中か奥樣か

玄關をめつたにあけぬのも舊家

玄關へ送られて出る晝の雨

保險屋ですと玄關の闖入者

スタイルに或る日の兄がけちをつけ

蚤の市よつてたかつて搔きまわす　大津　鈴木石鹿

空襲へ水桶ちつとはしやぎすぎ

へそくりで目立たぬパーマかけて來る

浮氣にあらず又々轉業し

團參が武運長久の旗をたて

臨終へお米をさげてかけつける

防火用水たつた八斗のホテル也

御詠歌の趣味はお通夜を報らせあひ　朝鮮へ發つに際し

招かれた茶席の軸に無事とあり　今治　月原宵明

廣告稅以來屋根裏曝け出し

公定の蓮根泥にまみれてゐ

筍を賣つて歸りの投票所

增稅へ僕の月給も桁へ乘り　曉蕾君健闘

三十の一等兵へ迎春花

斥候を果しアカシヤ折つて來る

しくぢりを謝る樣に火を借りる

百姓を美むことの變りやう
木枕へ針山程のはゝの髷
公葬へ故郷の母校さみだるゝ
ふるさとの蓮華たんぽゝ遺骨着く
櫻鯛五月の陽にはまぶし過ぎ
靈柩車春の埃をたてゝゆき
落下傘腰の人形も悲なし
落下傘奇襲にしては綺麗すぎ

大牟田　高田抱逸

校長の俸給などにこだわらず
防空壕乞食が住んでそれで無事
添ひ遂げぬ酌婦の繼はおそろしい
煙草屋は無口でゐても賣切れる

下關　國弘半休

床揚げの顏を新妻剃つてゐる
日本の空を小癪な音をたて
多産系それ相等な金があり
忙しい日の腕時計とまつてる

西宮　阿萬万的

知り合ひの客へは公定表も見せ
母に似し老婆の所作を見つめてた

ハイキング（福津耶馬溪阿武山ピース）

峠一ツ越えれば隣村の風
初夏の磯へ來て目藥をさしました
靜かなる海に吸殼捨てゝ來る

尼崎　小林文月

長女京府立女專入學入寮す

先輩に賴りすぎてる一年生
ミツマメで歡迎される新入生
先輩の眞似を舍監にとがめられ

伊丹　酒井美知夫

もつたいない火種が殘るしまいバス
舟板塀開けるとベルが鳴るしかけ
栲問の型でパーマは出來上り
かくれんぼくさみを制すすべもなし
朝々を父のかたみのソリンゲン
債券のくじを待つてる居候
まだ生きるつもり姑入齒する

尼崎　飯尾寄與史

悼岡村和郎氏（二句）

洋酒の名一ツ教へてもろただけ
迷信を信じぬ親を殘しとき
子を見せに來て女工さん辭職に來る

大阪　浪玲之介

言ひ負けて眼鏡のゴミを拭いて見る
轉業をして海行かば唄ふなり

大阪　德永雅美

女の子產婆の內へよく馴染み
ハモ入荷賣れぬとみれば骨を切り
商賣が代書女に智慧をつけ

西宮　谷口綠葉

雜草の力を知つた休閑地
人生觀嗤ふたんびに變へてゐる
男から意地を捨てろは無理でせう
然る可き哉と禀議うまくなり
印鑑を掃除しながら春の雨
よく聞けば聲量のある蛙なり
家の紋丹下左膳と同じなり

★人の顏といふものはよく似てゐるやうでも、どつかに違つてゐる。同じ親を持つ兄弟姉妹の顏でさへ、違つてゐる。私はいつもそこに興味を持つ。私は「川柳塔」の作品の一句一句に、又作家の一人一人にも、そう云つた違ひを知つて、その作品を、その作家をのばすことに專念してゐるのである。「川柳雜誌」の句が多彩であるといふ聲をよく聞かされるが、それを感じて喜れる人は私の苦心を知つて喜れる人である。（路）

川柳世界史

(XIV)

戸田孤篷

(一九) 文藝復興

ヒューマニズム

中世暗黑時代とは人間が作つたはずの宗教が人間を牛馬の如く奴隷の如く酷使した時代。人間を人間として取扱ひ認め、同情し、怒り、喜び合ひ、悲しみ合ふ。之が人文主義即ちヒューマニズムである。イタリーを中心として西洋の夜明がはじまる。十三世紀より十五世紀にかけて。

ヒューマニズム王様少しけむたがり

後宮の隱語にもなるアラビヤ語

羅馬法輪講カロロの席もとつておき

バツガスがどうのと酒場賑々し

(註=バツガスはギリシヤの酒神)

文藝復興と文學

キリスト以前に還れ、ギリシヤがあり、ローマがあり、ヘブライ、フエニキヤ、ペルシヤもある。先ず言葉を文字を探究する。ダンテの神曲、ボツカチオのデカメロンなどその先驅として現れる。

こはいもの見たさ地獄繪先ずかゝれ

デカメロンそこまでくると伏字殖え

「おゝ太陽」唄へばアポロの歌になり

文藝復興と造形美術

西洋畫を好み西洋美術史を談る程の人でルネツサンスの名をきゝ、ダウインチだのミケランジエロの名をきいたゞけで武者振ひせない人は一人もなからう。

その鼻祖となつたのがヂオツトである。

ルネツサンス親鳥構造論にふれ

藝用解剖屍の胸に燭を立てモナリザに死なれてやつと描きやめる

ミケランジエロまだあほむいて物を讀み

ジヨツトにしてまん丸が一つかけ

文藝復興と科學

ダウインチは畫家であるとゝもに科學者でもあつた。計算と心中したダウインチなんていはれるくらい。飛行機への構想も持つてゐたし、解剖學の權威でもあつた。コペルニクスは地動說を立てゝ地球人をおつたまげさすし、グーテンベルグは活版を發明し實用に供す。

ダウインチの憧れ鳥の骨を描き

花文字の活字を鑄るに暇が要り

無智有智たゞ無駄があるばかり

天才の豫言は嘘でなかりけり

アリストテレス誤譯を焚きにはけて出る

文藝復興と教育

ルネツサンスの教育といへば修辭學、この中に百般の學藝がふくまれてゐた。その博士は各所で引つ張りだこになり、王様の宮殿から傭兵のテントにまで足跡をのこす。結局は古典古文古語の研究が中心をなす。

名をすてゝきくローマ學ギリシヤ學

ドイツとルネツサンス

非ルネツサンス的なものを多數にもつてゐたドイツ。中世唯一の技術的なものとして誇つてゐたゴチツク建築をいつかな捨てようとせず、華かなものよりその陰に存在する古典を通して眞のキリスト精神に生き、ルツテルの宗教改革に一歩一歩近ずく、月を男性扱ひにする風土の俊嚴さを配景として。

ゴチツクの秘傳書だけはとつておき

弦月の下でフアウスト語られる

スペインとルネツサンス

スペインは暗黑時代唯一の文化傳承者アラビヤ文化の中心地コルドバをもつてゐた。それにもかゝわらず割合あつさりと新文化様式の攝取につとめセルバンテス作るところの「ドンキ・ホーテ」、ほんとに鈍くさい間抜けのくせに憎めない人間的探究に精進するこの老騎士の姿に神々しいものを感じる。

ドンキ・ホーテ曰く俺は人間様なるぞ

フランスとルネツサンス

固有のフランス文化の上に雜多の議論を經てルネツサンスが取入れられ、やがて御得意の美術に工藝にその華を開かせる。併し元來の舊教國。頭の古い僧を包容するこの國は新舊衝突による流血も又やむを得なかつた。

デカンショの筆頭デカルトの哲學も登場する。

マロニエの下で技巧が論ぜられ

ラテン語をやるとリエゾン又かはり

頻つぺたをつねると生きてゐた私

ネーデルランドとルネツサンス

こゝにはルーベンスが居りレンブラントが居つた。デカルトの遺鉢をつぐスピノーザも出る。

光線をかへて奥さん又坐り

むつかしいところは影の方におき

張り店の繪をルーベンス引受ける

イギリスとルネツサンス

先の大戰、三年目からやつと腰を入れた英國。ルネツサンスの完成したのもはるかに後代のエリザベス時代。ジヨンブルはジヨンブルらしい經緯をもつ。

セキスピア一人を産んで口をふき

ルービヒサア
大日本麦酒株式會社

武玉川五編研究（一）

梅本塵山
森東魚
蛭子省二

清池滿夏雲

（1）師匠の口の人にさわらす

省二＝師匠となる程の者は、濫りに人の噂などはせぬ。しても、差障りのない巧みさであらう。（點印に清池とあり又清地と刻さるれ共、池が正しからむ）。

東魚＝誰にも如才なく、云はゞ八方美人的な人物が、想像されるから此師匠藝事のそれであらう。

塵山＝琴か三絃の女師匠で、男師匠の所作ではなからう。

（2）見送て戻れハ燃るあふら皿

省二＝客を見送つて戻つてみれば油皿がヂィ〳〵と、音をたてて居る。見送の折の、何んとなう、そわ〳〵とした氣分と、油皿の燃ゆる光景とを結むだのは、感じさせるものがある。

東魚＝主人の侘びた住居が思はれる。燈心の乏しくなつて、客去つたあとの淋しさが、一層感じられる。

塵山＝曉天に旅立つ人を見送るので、普通の來客ではないと思ふ。

（3）都うつし歌よむ程に出來あかり

省二＝「都うつし」とは遷都の事。歌を詠み或は詠まるゝ程に、新都は整頓しつゝある。

東魚＝新都禮讃の歌がよまれる程見事な規模に出來あがりつゝあるのであらう。

塵山＝土地を限定するに及ばぬが福原の新都とでも云ふ可き歟。

（4）赤子もらいの醫者へ相談

省二＝貰らひたくもあり、事は一生に關係する問題だから、決意し兼ねもする。そこで母子の體質其他に就て先づお醫者樣に伺ひ相談する。

東魚＝母親は產後が惡く、それを診療してゐる醫者へ相談して、赤子を貰ふ場合らしく思はれる。

塵山＝母となる女の體質に就いての相談で、赤子を診察するのでは無からう。

（5）輕業を出て反り橋をふところ手

省二＝眞似てみたい氣分になる程輕業が面白かつたのである。句としては賞めたものにあらざれど、古句には、かゝるねらひ處がまゝある。前句に關聯したら興があるかもしれぬ。

東魚＝のんびりとした氣分に、自然な可笑味がわいて失笑させられる。寧ろ私は面白い句と思ふ。

塵山＝莫迦々々しいけれど、斯る事は有りさうに思はれる。

（6）五位と六位ハ錢も借り合ふ

省二＝五位と六位には、聊か區別が存するけれ共、一位ちがひ丈けに顏を合はせる場合も多からう。親しくもあり氣易さから、貸借關係も生ずるであらう。諸臣九位に分かたる。

東魚＝昇殿を許される最下位の五位。大體は昇殿を許されぬ六位の連中などは、官人と云ひながら、お互に取りすましきらぬ處がある趣。小額の金の貸借りなども、あけすけに仕合つたらうと云ふ輕い穿ち味、面白い附句と思ふ。

塵山＝五位は殿上人、六位は地下人で、身分は相違するけれども、大差が無いのである故、金錢の貸借關係も生ずるのである。

（7）木からしや口の下から片手わさ

省二＝木枯ふき寒さを覺ゆる。本業丈けで、たつぷりであり、さう云つて居る口の下から、片手業などやる。

東魚＝本業以外のせずともの事を木枯が吹く頃なのにやると云ふのか口の下からの場合がよく解し得ない。

塵山＝初冬となり、日短かに成つたと口には云ひながら、本業を怠つて片手業のみする。

（8）立退て京ほと怖い所ハなし

省二＝氣をゆるめて遊び過ぎたのであらう。京の女は美しいし、景もよし、お金の要る場所だ。二度と行くまいと怖がる。だが『毒と知りつつ又見たい京』（武・十七）。

東魚＝美しい女に、はまりでもしたのであらう。

塵山＝江戸つ子が京女に箝り、旅費まで遣ひ盡して、後悔するのである。

（9）付さしに口を付るとあちら向

省二＝付差は酒、茶、煙草などの場合に用ふる言葉。付差を受けた人が口にするのをみて、恥しい氣分が起り一寸顏をそらす。

東魚＝口を付けてくれる迄は、氣

にもなつて見まもつてゐる、心持ちであらう。

塵山＝耻かしかるの歟。いやな奴だと侮るの歟。多分は後者であらう。

（10）

あミ笠を貰て人にうたくられ

省二＝旅に出るのではないか。それが編笠をかぶつて行くとなれば、何にか理由が有るのではないかと、人に疑はれる。

東魚＝外出に顔を見られたくない何か譯がありさうだと、疑ひの目でみられる。浪人者であらうか。

塵山＝編笠を貰つて行くのであるから、何か人に顔を見られるのを厭ふ身である。と他人が疑ふといふのである。

（11）

親の聞てハならぬうハ言

省二＝譫言にいふのが本ンの事なれば、親としては聞いて置くべきであるが——此句、息子でも娘にでも通じはするが、息子が馴染みの譫言を云ふのではなきか。

東魚＝娘がうわ言に戀しい人の名でも云ふ場合かと思ふ。聞いてはならぬものを聞いた親の心持ちは、一層いとしさの增す事であらう。

塵山＝女が譫語を云ふのでは、色消しである。

（12）

病上りうつくし過てうそらしき

省二＝生來美人であると、病上りは又それで、別箇の美人美を發揮するもの、嘘らしく感ぜしめらるる程に。「過ぎて」が句の味。

東魚＝美人は病めば、病むでうつくしい。病後とも思へぬ美しさにうたれる。

塵山＝病後は容姿が、一層凄艶なので、病上りなどと云ふのは虛言であらうと、他より見て讃美する。

（13）

むすめに切て見せるいたゝき

省二＝「をさなごの春の初めのいたゞきに、つかさ位はそなへあげつつ」。女の子が五歲に成る迄は、元日に餅で頭を三度撫で廻し、「官位高かれ命幸高かれ」と祝つた。その餅を食べた。戴餅と書く。

東魚＝「いたゞき」は、四月八日に佛に供へて喰ふ新粉に餡を配したもの、（蓮瓣をかたどつたやうな形のもの）をも言ふ。句意十分解し得ぬ。

塵山＝私は灌佛會の戴餅でなく、小兒の戴餅であると勘へる。此餅のことは「蒼梧隨筆」に詳記してある。

（14）

請て見たれハ晝飯も喰ふ

省二＝廓から足を洗つて請出されたら家庭人なのだから、三度が三度食べたからとて不思議はない。それを晝飯も食ふワイとみた處が興。

東魚＝矢張り人並に晝飯もくふ。廓に居た時は、ついぞ食つたのを見なかつた氣がするとの輕い可笑味。

塵山＝遊廓では上品ぶつてゐた花魁も請出して見れば普通の女で、人並に晝飯を食ふと云ふのであらう。

（15）

旅芝居皮癬を藤て通りけり

省二＝皮癬をうつしてゆくのは、いかにも安ものの旅芝居者らしい。

東魚＝芝居と云へば華かだが、內實の不潔さ、だらしなさが想はれる。「一村を粹にしてたつ」とは、又ずつと格の卑い連中であらう。

塵山＝皮癬は最も傳染し易い皮膚病で、旅役者などは、これに罹つたものも有つたらう。

（16）

つめつて斗ありく大とし

省二＝「大歲の病は常の不養生」の結果だ。大晦日が無事に越せるか苦肉策が要る。

東魚＝各所の支拂の切詰め策に、奔走してゐる。

塵山＝「つめつて」は、詰つてゞあるらしいが、少し曖昧の言語である。

（17）

ゆるかして腰を懸たる磯馴松

省二＝古木であり、地に傾いて居るので、折れはせぬかと、一度搖すぶつてみた上で腰を下ろす。

東魚＝這ふやうに低く出た、松の枝の姿がうけとれる。（名著全集柳雨本には、「ゆるかしく」とあり）

塵山＝老松の幹が曲りくねつて岩の上に腰を懸けたやうな態らしい。

省二＝原本「く」と讀みたいが、筆下ろしの處に、少しヒツカケが見える。以て「て」と讀み置いた。

（18）

ぬれて來た鵜を撫て遣る母

省二＝濡れて歸つてきた鵜を、やれ〳〵可愛さうにと、撫で勞はつてやるのは、流石に母親の思遣り。子の親にならぬと、斯る愛情が自然にしみ出ぬもの。

東魚＝働いてきた鵜を、いたはる心持ち。

塵山＝己が子のやうに可愛がるので人の母たる愛情が表はれてゐる。

ん・で・あ・が・ふ・う・る

東京放語

福田山雨樓

今度藝術院賞を貰つた詩人高村光太郎の詩「必死」の一節に「皮肉をいふな」とあります。この時局、この必死の場合あらゆる閑文字は許されないといふ見地から皮肉を揚棄せよと叫んでゐるのであります。川柳の本質には皮肉がかなり大きな部所を占めてゐると思ひますので、聊か考へさせられました。考へねばならぬヒントを與へられました。果して現下川柳を通じて皮肉を言つてはいけないでせうか皮肉は閑文學でせうか。小生はこれは一概に云はれぬことだと思ひます。なるほど小事に拘泥したウツプンや不平を皮肉に托して言ふことは大戰爭下慎しむべき事でせう、徒らに小市民的なあげつらひは止すべきでせう。がしかし、正義に立脚し眞實國を思ふ念から發する皮肉なら、大いに飛ばしてもいゝと思ひます。まだ〳〵自由主義、利潤追求觀念に捉はれた者どもが少くありません。川柳は彼等の覺醒を促すため、寸鐵骨を刺すの氣慨があつて可然、と思ひます。社會を淨化する皮肉こそ望ましい。

○

今度の選擧で僕の投票した候補者は不幸落選した。忙しかつたり旅行したので各候補者の演說も聞き洩らした。仕方がないから選擧公報や推薦狀によつて各候補者の品定めをしたのである。尤もA候補者は豫てから顏見知りであり地元候補でもあるので――結局Aが最高點で當選した――これに投票するのがよかつたのかも知れぬが、僕はAに對し、ある時不快な印象を見たことがあつたので、今度は頭から彼に札を入れる氣がしなかつた。虫が好かなかつたのである。しかし最高點で當選した程の人物であるから、一片の好き嫌ひなどで贊否をきめ充分なる人物檢討を怠つた罪は免れない。僕の投票したB候補者は選擧公報を一讀しただけで僕はピンときた。恰度川柳の選をしてゐて一寸見ただけでこれはいゝ句だと直感するやうなものだ。これがうまく當つてBが當選してゐてくれたら僕の鑑定眼も相當なものだつたらうが、見事に外れた。しかし僕は後悔しない。彼は將來必ず出るものと信じて疑はない。再度の落選ではあつたが。

○

健民運動週間として鐵道省内に健康相談所が設けられました。どうも昨年來痩せて肥らぬので、これを機會によく診て貰ひました。胃アトニーと診斷されました。博士の云はるゝ養生法が面白いのです。水を呑むな、飽食するな、胃が下つてゐるのだから腹にきつく帶をしめて下垂を防げ、藥は別段ない、胃散をのむ位のことだ。彈力を失つたゴムのやうに胃がひろがつたまゝ縮む力を失つてゐるので、ガスがたまり水とガスとがたまつて腹が鳴るのである。との事です。小生は空腹感はないが食べれば食べられるのでいつも飽食してゐました。水や茶はガブ〳〵飲んでゐました。まるで反對のことをやつてゐました。今迄幾度も醫者に診て貰つて相談したのですが今日のやうにはつきり云つてくれた醫者は始めてでした。空氣のぬけたゴム毬のやうな自分の胃袋を想像しておかしくなりました。

堺の史蹟を覗く

＝松坂倶樂部川柳講座＝

松坂倶樂部藏生路郎川柳講座の人々が南進日本の華やかな歷史をもつ堺の史蹟を探ることになつた。

四月の第三日曜（十九日）午前九時三十分、南海山手線の天王寺驛に集る。孤蓬、白面人、美奈子、聖司アート、博也、石鹿、恒太の八氏。路郎先生とは仁德御陵で出會ふことになつてゐるとのことで、滿員の電車に押し込まれた。仁德御陵の參拜を以て、本日の吟行が初まる。

仁德御陵は孤蓬氏の說明に依つて世界一の底面積を有ち、ギゼーのピラミッドより大きいと云ふことを知る。民のかまどの煙を以て後世に迄語り傳へられた聖天子の御陵にたゞ〳〵頭を垂れ當時を追懷するのみ。

御仁政を偲ぶに御陵相應しき　アート

夢に見た寒さとなつて御陵暮れ　菲乃

路郎先生と會ふを得ず兎に角、大安寺へと向ふ。小學校時代の讀本で「畫師の苦心」として習つた狩野永德の數々の名畫が殘されてあるさうだ。訪なへば何の變哲もない寺だが刺を通じて暫らくは

今日又警戒警報、油斷はなりませぬ。

○

この前胃腸を害したとき某人君から「それで文士の仲間入が出來まんなあ」とひやかされたことがある。文士のやうな仕事をしてゐると自然胃弱になるのであらうか、胃弱になると文章がよく書けると云ふ事實を自分は身を持つて體驗した。神經が昂ぶつたり睡眠が充分にとれなかつたり食慾が減退したりして、健康と云ふ點からは乙、丙に落ちるのであるが、筆をとる能率や氣迫の點では甲になる。子規が病床にあつてあの偉大なる業蹟をのこしたのは一見驚異とされるが、子規が病身であつたので却つてあれだけの仕事が出來たのではないだらうか。子規が健康そのものであつたならそれこそ睡生夢死に終つてゐたかも知れない。だが凡人には健康なことが一番幸福のやうである。平素頑健で時々胃腸を害しておれば平凡なりに多少の書いたものを殘すことが出來る。これは大分逆說めいた言葉ではあるが。

○

當監察官附に萩原博と云ふ青年がゐました。昨年應召で中支へ派遣され、元氣で奮鬪してゐましたが、先般匪賊討伐の際血達磨七勇士の一人として奮戰し、不幸敵彈に當り右大腿部に貫通銃傷を受け治療の結果遂に大腿部から切斷の止むなきに至りました。その後の經過は順調で次第によく、松葉杖でぼつ〳〵歩けるほどになつたとの便りが參りました。この青年はとても文學が好きで仲々うまく、在京中文藝雜誌に創作を投稿して當選したことも度々ありました。將來はキツト戰爭文學の方で身を立てることゝ存じます。第二の上田廣になつてくれと出征のときも話したほどでした。本人は頭もよく（第一高等學校を受驗して、美事不合格ではありましたがたしかに秀才です）眞面目ですから必ずや相當の作家になることゝ信じます。「右足はお國へ捧げました」とあるハガキを見て、われ〳〵一同は心から同情の涙と感謝の念を捧げた事でした。歸つて來たら暖い手で慰めてやりたいと思つてゐます。

○

東京にゐる御蔭で講演會などは絶へず聞かれます。今晚も神田の共立講堂でかなりいゝ講演會があり、是非參聽したいと樂んでゐたのですが生憎忙がしい仕事があつて九時頃まで居殘りをせねばならぬことになりこれを逸したのは殘念でした。氣をつけてゐると月のうち三回や五回は必ずいゝ講演會があつて當代一流の名士、雄辯家の講演が聞かれます。日比谷公會堂、軍人會館、共立講堂、青山會館、日本青年會館、一ツ橋講堂、朝日講堂等々で大抵何かやつております。先日は有樂町の帝國鐵道協會の講堂で元滿鐵理事の伊澤道雄氏の「大陸鐵道雜感」と題する講演がありましたのでぶらりと聽きに參りましたところ、聽衆者が意外に尠く僅々二、三十名に過ぎませんでした。全く講演者に對し氣の毒でもあり失禮でもあると憤慨を禁じ得なかつた次第であります。しかもそのお話がとても有益で熱心でわかりよかつたので誠に惜しく思ひました。尤もこれは速記にとられ會員はあとで雜誌を讀んで知識を得ることも出來るのですが、耳から受入れる方が早道です。それから鐵道省の八階でも毎月禪提唱（鎌倉淨智寺住職別峯老師）があつて、大變難有いことなのですが、これ又參聽者少く二十名內外に過ぎませぬ。ほんの一時間殘つて聞けばよいものを、東京の者は莫迦に歸りを急ぎます。

○

仕事の關係で銀座の日本出版文化協會を訪ねて參りました。この前行つた事があるのでその建物のところへ行つて見ると、樣子がチト變です。よく見ると入口が別の方にかはつて看板は「日本印刷文化協會」となつてゐます。這入つて聞くと「出協」は先般神田の富山房の二階へ移轉したと云ふことでした。小生が賴む仕事は「出協」か「印協」かはつきりしないのですが、「出協」の方が近いだらうとその足で富山房へ訪ねて參りました。受付は地下室でした。係の人に聞くと、新らしい出版企畫（過去の實績のないもの）は許可されない方針だから一應情報局へ行つて賴んで御覽、と云はれました。仕方がないので出版にくはしい知人のところへ智慧を借りに行つて、やつと樣子がわかり、又更めて情報局（これは三宅坂の元參謀本部跡にあるのです）へ訪ねて參りました

待たされて戸を繰る音を聞いてゐる　白面人

案內に連れられて「鶴の間」だ「藤の間」だ「松の間」だと襖の繪に因む部屋でたゞ〳〵うなるばかりだが、解つたのか解らないのか檜の葉が一枚一枚克明に畫かれてゐるのには居候畫家の悠々迫らざるものを感じた。

永德は氣がふれましたよと小僧いひ　恒太

廿六羽猫かねばたゞの居候　路郎

永德に東海道がなんのそのはるゝ〳〵と枝書き添へに歸つて來　アート石鹿

歲月が古りて苦心の下繪見ゆ　同

此ふすま一枚欲しい大安寺　蔑乃

寂光の中で襖の葉を數へ　孤蓬

夜な夜なの障子の影がこの鶴か　博也

見返りの藤をも一度見返つて　同

慾のあるのは蔑乃女史だけじやなく、明治の初年に永德の襖の金箔が盜まれて、あとを金ピカの箔がしてあるのは惜しまれる。

この寺の建物は、有名な呂宋助左衞門が豪奢を極めた邸宅であつたのを寄進せしものださうだ。堺の建て倒れの代表的建築であるとのことだが、大和信貴の坊主松永彈正が柱にきづを殘し

いたづらをして彈正は名を殘し　恒太

あの高壯な三宅坂の砂利を踏んだときには何だか一種の威壓を感じました。刺を通じて係の方によく事情を聞いて、初めて合點が參りこれから又出直して手續を踏むわけですが。出協と云ひ情報局と云ひよくもまあこんなに移轉が好きなのかしら、と思ふと仕事の事を忘れてほゝえまれました。

○

兩國、國技館、夏場所大相撲初日の番狂はせは歸還力士九州山が大剛横綱羽黑山を甸はした一番でせう。ラヂオは蹴たぐりと放送しましたが、新聞で見ると飛違ひと出てゐます。何としても一瞬の早技で流石の羽黑もアツト云ふ間に土俵の砂をつかんだことでせう。自分の力で倒れたとも云へませう。評では羽黑があまり愼重に過ぎた結果と云ふ風に書いてゐましたが、双葉もこの前櫻錦のためにこの手でやられたものです。相撲の面白さはしかしこんなところにもあるわけですね。子供がとても相撲が好きで勝つた負けたに血眼になつて星をつけてゐますが、ひいきと云ふものは誰にもあると見え、照國や神風に應援してゐます。小生は名力士玉錦なきあとの一門を率ひて奮鬪してゐる玉の海が一番好きで、彼を早く大關にのぼらせたいと念ずるものでありますが、いつも今一歩と云ふところで惜しいことをします。鄕土力士大邱山（岡山縣）の如きは關脇までなつたのですが、その後振はず前場所限りで年寄りになつたやうです。神奈川縣から出た武藏山も今は年寄りとして盡してゐます。目下では相模川が唯一のホープとして一流の鐵砲を發揮してゐますが、これはおそらく大關までは進むでせう。六代目が大變ひいきにしてゐるといふことです。

○

當監察附の岡部藏造兄（號士節）はこのごろ大變川柳に熱心で、小生の最もよき話相手として共に樂んでおります。古句の研究なども仲々熱心で、川柳に關する書籍をどし〳〵買ひ込んでゐられます。古本屋で雜誌の出ものがあると兩手にさげ切れぬほど買つて來たり、關西へ出張した序に岐阜へ寄つて、あすこだつたら何か掘出し物があるだらうと街の古本屋を漁つたり（但し、岐阜では收穫がなかつたさうです）とてもよく氣をつけてゐられます。今日も今日とて、二人で晝食を喰べ食堂から歸つてもなほ話し續けて大いに川柳熱をあふつた次第であります。同兄は仲々の物識りで大阪鐵道局の運輸課にゐられた當時「鐵道用語辭典」と云ふ尨大な辭書を編纂された方ですが先年望まれて本省に入り再び改訂「鐵道用語辭典」の編纂に當つてゐられます。今度の辭典は更に一層內容の豐富な大がかりなもので出版の曉は學界始め各方面から珍重されること、存じます。同兄は辭典を小生は交通學會の「交通論集」を共に出版の事に關與し、共に大鐵から本省に入つた仲、今後も相提携し相はげまし合つて仕事の成功を念じ合つてゐる次第であります。

斷斷語

和泉生

◇　鈍重そのもの、如くで、しかも尖銳限りなき神經の持主だつた亡友小出楢重。曾て戰艦陸奥の櫓式の前檣を指して、「君、この構成美ツマリ必要美（?）が解らなアカンデェ」と言つたのがいまだに腦裡深く刻み込まれてゐる。

◇　日本へやつて來た毛唐（米・英人）が日本娘の文金島田髷を「頭の上の偉大なる建造物」と言つて魂消且つ否定はするが、遺に丸髷の莊重美にはアツと感嘆して見惚れてゐたのは事實だ。

◇　兼好は「徒然草」で「造作は用なき所をつくりたる、見るも面白く、萬の用にもたちてよし、とぞ人の定めあひ侍りし。」と卓說を吐いてゐるが、丸髷は即ち「用なき所をつくりたる」美であり、電髮は「用なき所をすべてカツトしたる」必要美（?）とでもいふべきか。

◇　幾何學は曰ふ「逆も亦眞なり」と、前者後者、柳は綠花は紅。所詮、もの、美を抽出するは人その人の琴線の差乎。

◇　大雅を無條件で贊するワレラではあるが蕪村も亦掬す

滿ちたるは缺くる習ひと刀きづ　石鹿
彈正の腕も知れたる刀傷　博也

大安寺で大分時間を潰したので南宗寺へといそぐ、堺の市中とは思へぬ閑寂の世界

案內を乞へど禪寺音もせず　白面人
純綿かスフかしらぬが破れ衣　孤篷

漸くにして出て來た破れ衣の昔の雲水そのまゝの青年僧に案內をされて

本堂の緣をぐる〳〵と廻る。そこは千の利休の遺した茶室。自殺した茶室、こゝも解らぬながら、さびとかわびとか云ふものを見せて賣ひ、又茶室の中で立つたり腰つたりして氣分にふれてみる。

拜觀は親しく利休さんと呼び　アート
南宗寺末期のお茶を利休くみ　恒太
自殺した利休の位置も考へる　博也
因緣を聞けば茶室も凄く見え　白面人

ついで後藤又兵衛に殺された德川家康の緣の下の墓に詣で線香をあげる。正史はなんと傳へるか知らぬが緣の下に墓を持つ男は日本廣しといへど家康一人

正史には出ない無緣の墓一つ　孤篷
家康の末路は哀れ緣の下　石鹿
家康の最後をも見た松の丈け　博也

べく棄て難い。

◇ 盟友川上日車に句あり、

美しいものに藝者も入れておけ

（一七・五・一五夕）

隨想三題

小山文三

大根役者

大根は野菜類の内でも最も親しまれる處のものであつておろして良く、煮てよろしく漬物として、干物として最用途が廣い、實に昨今の樣な食糧取入れ難の折柄でも大根だけは容易に手に入つて誠に重寶なものである。

そして大根に限つて、どんな不手際な料理でも決して中毒を起さない、即ち昔から大根に中つたと云ふのを聞かないのである。

名優の演ずる妙技は常に大當りであるのに反して、馬の脚にも足らぬ役者の一向、當らぬのを大根役者と云ふ語源はこゝにあるのであると聞いてゐるが果してどうか。

女學生の太い脚を練馬大根と云ふ、蓋し似て居るからであらう。

鐵ちり

大阪でも、東京でも河豚のちり鍋を、鐵ちりと云ふ。其昔禁制を犯してでも河豚を食はねば納まらない樣な惡趣味の食道樂連が世を忍ぶに名づけたものであらうか。

鐵砲に當れば死ぬのが普通の常識である。河豚に中毒つたら大抵は死ぬるものらしいこゝで鐵ちりと名づけたのだと言うた人がある。眞僞は保證の限りでない。

お茶を挽く

御茶を臼で挽いて抹茶にするのに機械挽きと手挽きとあつて、前者は安く後者は茶の湯の宗匠に珍重されて高い。

昔から京都では茶人が多くて挽き茶が人もて嘶されて、閑々に茶を挽く人が多かつた。

晝間に暇の多かつた昔の藝妓共は此茶を挽いて閑を潰したものであつた。

今でも一向座敷の掛つて來ない藝者をお茶挽きと云ふのはこゝに胚胎するのである。

私

奥村丹路

片方の眼を塞いだ時私は樂天家である

そこで得意氣に句が出來る

その時　私は不幸だと思ふ

兩眼をかつきり見ひらき凝視する時

白い句箋はいつまでも白い

その時　私はもつとも幸福である

そのふたつながらの私を

今――限りなくいとほしむ

鷄卵事件

長野文庫

筆者は町内の配給係をやつて居る、この間も鷄卵の配給を爲すべく店頭で町内の人々へそれ〴〵割當てをして居た處、市の近くで家では小農業をやり乍ら市の青年學校の指導員をして居る某氏が訪ねて來て曰く「僕は此間卵がアタつてネ」更に何か云はうとして居るのを皆聞きもせず筆者が「ホホン貴方とこの樣に鷄を飼つて居て食ひ餘して未だ賣る位の家庭（その人の家は鷄を二十羽ばかり飼つて居り卵なんか買ふ必要のない事は熟知して居た）に卵を配給するとはどうかして居るネ、大體現在の配給制度は」聽いて居る相手は合點のゆかぬ樣な顏をして居るが筆者は委細構はず「卵が有り餘つて居る家へ尙頭割に卵を配給するのは配給係もどうかして居ると思ふヨ、これが所謂杓子定規で融通が効かんとでも云ふんだらう、卵に限らず他の色んなものでも配給に就ては是正すべき點が澤山ある、例へば」と益々遠慮氣もなく喋べらうとするのを漸く彼氏が止めて「イヤ僕に當つたと云ふのは何も卵の配給が當つたと云ふ意味ぢあないんです、この腹にアタつたんです、生理的な問題ですヨ」と云つたので頗る勘の惡い者も漸く食傷したと云ふ事が分つて大笑ひの末「そりやヒドい目に遭つたですネ、もう良いんですか」と改めて見舞を述べた始末だつたが、日本語を云ひ樣聞き樣で大變な違ひがあるものだと思つた。

日本は廣し

田邊由布

驛の構内をトボ〴〵歩いてゐるみすぼらしい青年があつた。何處から這入つたのか、何の用があるのか、と訝しく思つて、「どこから來たんだ！」と稍々叱咤するやうに云ふと、彼は平然として應へた「ハイ、支那から來ました」……ああ日本も廣くなつたものだ。東京ベルリン間の直通列車の案もある、とか聞く。

上海だビルマだ地圖を追ふ列車

最後に禪の道場を見せて貰ふ青年僧は最近歸還した早大出のインテリ僧だが、雲水修業に較ふれば、前線の苦勞は苦勞に非ずと悟つてゐる。そして撲ぐられる話を聞くこと十數分

禪修業擲ぐる棒まで見せてくれ　白面人

時正に午後一時、晝食と作句の場所である大濱の商品陳列館へ急ぐ、先生御夫妻が晝食の用意を整へて待つてゐて下すつた。

二合三勺や四方山雜談の中に食事が終り近くの水族館へ食後の散歩としやれる。

水族館の序幕錦魚を泳がせる　葭乃

水族館魚はみんなまづく見え　白面人

水族館に雀鮨にもされず生き　路郎

縞鯛はキング眞鯛はクキンにて　葭乃

水槽で伏せつの形とるあかえ　同

蚤をとる形で章魚はうづくまり　白面人

ガラスまで來てバツクする櫻鯛　葭乃

子を連れて水族館は暇がいり　アート

時局下に魚の習性見てゐたり　路郎

水族館魚とり〴〵の迷彩よ　同

水族館みなそれ〴〵の武器を持ち　同

水族館の散歩をすまし會場で作句三昧と棚談に耽り、午後五時三十分解散

（石鹿記）

樽柳作近

路郎選

暖かさ看護婦さんも何か編み　和歌山　秋月　宏方
死んだ人を美しくもふと思ひ　同
煙草店
白梅がおとりの様にまだ殘り　同
四月十八日敵機我本土を初空襲す
蠅どもに牛はまばたき一つせず　同
長男、次男カメラに凝る
仕事着のポーズを今日も撮つてくれ　同
三代目利子を支拂ふ身とはなり　同
戰闘帽親爺近頃氣も若く　同
軍刀を杖にカーブへよろめかず　大阪　新川　博也
貸切の窓に白衣は嬉々と居る　同
防空網大阪府廳嚴とある　同
香具師仲間にも捷つ國の美談あり　同
叩き賣るバナナ、がなくて轉業し　同
赤襷かけて香具師とは見えぬなり　同
又友が大陸に行くクラス會　同
傘さして來た夕刊の香が嬉し　松江　本庄　稔民
敵襲へ非常梯子をたしかめる　同
汽車辨の箸止めさせた嫁ケ島　同
すみませんと云へば濟むのに交換手　同
方言がある綴方甲の上　同
まだ釣れぬ同志お天氣ばかりほめ　同
高利貸職域ですとまで云はず　岡山　岡田　笛六
引越しのケチにはあらず釘を拔く　同
横柄なパン屋となつて戸を立てる　同
蔦あまり身近く飛んで恐くなり　同
輕井澤女中としての輕井澤　同
あたまから戀を嫌うて女事を出　同
將軍の孫文學に趣味があり　大阪　橋本美奈子
草臥れた私にカメラ向いてゐる　同
弱く生まれお經も諳記してゐます　同
公衆電話白粉やけのした女　同
家の中走つて卒業叱られる　同
想ひ出の北支征服
黄塵をかき分けながら奪つた驛　朝鮮　加川　泉泡
何事もなかつたやうに糒飯を食ふ　同
回顧北支保定占領まで
敗兵がまぎれこんでる夜行軍　同

柳川 類題索引 (2)

川柳雜誌自一號至二二五號

▼題の配列はすべてABC順、題の下の日本數字は「川柳雜誌」の號數で、算用數字は其の號にある題の發表ページ數、例へば、汗五四(53)とあるは第五十四號(第五卷七月號)第五十三ページに汗の句があることを示すのである。

(一)人情、風俗、人事、身體、病氣 (2)

D

どもり　二八(15)
道樂　二八(26)
毒婦　三〇(6)
出戻り　三二(40)　五三(49)　一九七(22)　一九九(21)
出來心　三三(32)
墮落　三五(32)
弟子　三六(61)
同情　三七(37)　四六(48)　一九七(21)
脫帽　三九(47)
代筆　四六(52)　四九(54)　五〇(34)
旦那　四七(50)
團體　四七(51)　一九八(22)
出盛り　三三(54)
代理　三五(41)　三八(48)
同僚　七三(46)
獨身　一〇〇(57)　一八四(16)　二二三(32)　二五(32)
同伴　一〇一(38)

カンヂンのカンヂンな時驢馬がなき　同
花カルタ傘のあり敵陣地　同
袴を着た氣で昇る天守閣　松江　恒松　叮紅
感想が南へ飛んだ綴方　同
嘘の無い綴方なり兵の泣く　同
滿洲へ行く日は女强くなり　同
女事務時には田のこと畑のこと　同
花などゝ見ては濟まない落下傘　青島　蒿蒲　榮城
直し屋に見とがめられた靴の減り　同
ポケットの白旗摑んだまゝで死に　同
晩年好　支那の易者も如才なし　同
だんさんと同じ苗字と云ふ仲居　布施　古野　伶人
洋裁を習ふと決めた嫁きおくれ　同
飛行機のするするすべる春の草　同
滿員車背中で闇の公の　布施　古野　伶人
轉業者らしく夜學の隅にゐる　同
國策に沿つて漫才えろおます　同
二本づゝ素脚が並ぶ婦人席　同
御出勤モンペも入れた手提なり　同
春の夜の商店街に夫婦和す　大阪　浪花駒志希
道問へば京都訛が苛立たせ　同
打明ける覺悟彼方の山を指す　同
嫁入りにされて會社を辭めてゆき　同
手を擧げる手丈けが殘る米と英　朝鮮　村野東狂子
この一戰幕になるまで死なれよか　同

英米人に呈す

「ハラキリ」の日本人が御判りか　同
鮮農は古代姿で畑を打ち　同
裁判所お庭の隅のほうれん草　松江　恒松　叮紅
託兒所の子供魚雷か何か書き　同
城高く無事な八日の花盛り　同
櫻眞つ盛り月月火水木金金　同

ゆきずりの冷たき顏が忘られぬ　堺　德岡　映二
子を抱いて冷たい冬を知りました　同
少女四五人頭かしげて慰問文　同
人形ももんぺいはいてゐる昭和　同
物干が語るその家の暮し向き　京都　前川千狂子

敵機初空襲

空襲に鎧を出せとお爺さん　同
敵サンも逃げの一手は知つてゐる　同
明治大正昭和が並ぶ土用干　東京　岡部　士節
拜啓、草々だけでも嬉し慰問文　同
片カナが海越えて行くすばらしさ　同

クリツプス渡印

蜂の巣をつゝきに遠路はるばる來　朝鮮　高原惡源太

英・米潛水艦長曰く

白旗を積込んだかと念を押し　同
仕事可愛く寄附金をしぼられる　同
春がすみに候かのらに出る　廣島　大山　露斗
胃袋は今日も稼いでくれと云ひ　同
働かにや食へぬ身體だのみよ蚊よ　同
水兵へ休暇短かし横坐り　丸亀　平澤ゆづ蘭
燈管を覗けば地圖が奥にあり　同
空閑地植えると他人聲をかけ　東京　淺田　右開
ペソ、バーツ、ギルダー迄も圓價ヒ　同
インフレをどうしやうもない持てる國　同
歷々の推薦の勝つ總選擧　大阪　中野　延枝
平凡な女をむかしあはれみし　同
去るものは疎じ天井をながめてる　同
奥樣と思ひきつてる配給所　京都　中井白影子
漫才の今にモンペを履いて出る　同
事も無く易者の云つた月も過ぎ　京都　小坂ふじ彌
戰にます〳〵堪へる服のつぎ
ガソリンの匂ひそうな南方圖

傳說 一八〇(一八)
代表 一八〇(一九)
出鱈目 一八三(一八)
第六感 一八五(一六)
デブ 一八五(一六)
大願 一八六(一七)
默る 一八七(一九)
第三者 一九〇(二三)
第一歩 一九一(一七)
獨酌 一九二(二三)
動悸 一九三(一八)
だしぬけ 一九三(一八)
デマ 一九六(一七)
雜沓 一八六(一九)一九九(二一)
ドツコイショ 一九九(二一)
出迎へ 二〇一(二二)
妥協 二〇五(三二)
獨逸軍 二〇九(三四)
打開策 二一三(三一)
銅像 二一〇(三一)
出直す 二一三(三一)
獨立 二一四(二八)
脫線 二一四(三二)
同志 二一五(三一)

E

笑顏 二一三(一〇)一八三(一四)
一九五(一八)一九六(一六)
二〇二(二二)
榮轉 二一三(二九)一八四(一六)
二〇〇(二三)二一〇(三二)
襟足 二一〇(三九)
演說 一七二(一二)二〇七(三四)
エロ 一八一(一九)
遠慮 一九〇(二二)一九二(二三)
二一一(三二)
緣 一九一(一八)
圓滿 二〇六(三三)
緣談 二〇八(三四)

アドバルン無事上陸の文字をつり　同
轉業と決めて我が家の廣さなり　同　佐伯　鷄城
犬捨てゝ來て夕飯をまずく食べ　岡山
通譯は要らぬヒヨコの國に住む　同　山上　笑風
隣組おつと產婆だ合點だ
子の自慢唯それだけの用で來る　岡山

米機本土空襲

トンカラリで消した昨日の初空襲　同
初夏の窓診斷うける呼吸をし　同　山田　宙望
鼓笛隊ニュースカメラに眼もくれず　東京
鼓笛隊五體のどこも春にする　同　宮田　不二
鼓笛隊タイプもペンも窓へ寄る　同
當選確實代議士夫人茶を入れる　大阪
何が何んでも尾崎行雄が御當選　同　長谷川三司
二枚目を氣取る散髮屋の鏡　同
叱られた子に教室は廣すぎる　尼崎
雄辯がすぎて交涉云ひそびれ　同
重役の前に卑屈な我を見る　同

靖國神社臨時大祭

遺族章東京辯ではありません　大阪　野之　吐空
上　京
酒呑んで江戸ッ子少し眞似てみる　同
風の吹く角を廻れば靴直し　同　松浦　帆船
滿員をチューブの如く押し出され　大阪
北の方は折つてながめる東亞地圖　同
筍の不幸は道の端に生え　同
公園で會つた恩師の子煩惱　豐中　三輪　丘堇
獨り者氣がきゝすぎて哀れなり　同
春の夜の皆と別れた交叉點　同　宮川　春涉
出世した友を綽名でもう呼べず　京都
使はれてゐる身お世辭も板につき　同
間違を間違とせぬのも役所　同

偽はらざる近況

趣味同じ旦那はんらと作業服　大阪　桝岡　詩朗
春の街鮮人服の鮮かさ　同
整備統合金の無いのが束になり　同
子のねがひ妻は目顏できけと言ふ　大牟田　松島　波人
故障車の車掌思はぬ花を摘み　同
味噌汁にする一坪の芽を育て　同
湯殿から出る觀世流シテ　大阪　富岡　巨人
サボテンの花に似て居る娘にて　同
顏洗ろて東を拜む日本村　同
作業の手、大本營に止められる　大阪　平井　流舟
うるさ型、病んで常會あつけなし　同
鈍感だが空襲だけは知つてゐる　同
今度から獅子も住んでる大八洲　和歌山　左近　水京
捕虜やつと箸持つ事を覺えたり　同
青葉若葉護國神社へ行く白衣　同　北垣　神風
訥辯が祟り無實の罪を着る　和歌山
特務兵ですと明した愛馬の日　同
怪談の後の便所へ連れが出來　同
モンペが似合ふ貴女で一つ撮り　石見　田中　秀香
翼賛美人ですよと仲人派手に云ひ　同
轉業の手と手の荒れたのを笑ひ　同　有馬　千斗
軍需工妹婿も軍需工　大阪
火叩きを金魚の泳ぐ水へ入れ　同
出直して來いと敵機を拂ひ除け　同

三部長重役に選任さる

今日からはレコーダに用のない勤め　大阪　佐野　牛步
丸刈へ重役それがよい〳〵　同　粟井　蛙柳
討死をするかの如く獨樂倒れ　津山
自動車の光だけ降る夜の雨　同
看護婦はあゝ母に姉になり　滿洲　喜多猪三郎
見えぬ眼に涙たゝへて聞く便り　同

F
不幸　四(10)　五六(43)
ふられ客　一四(17)
不平　二九(32)　三〇(13)　一八五(14)　二四(37)　三二(33)
福引　三七(35)　一九三(18)　二〇六(32)
二日酔　三七(36)　四四(58)　五二(54)　五三(54)　一九三(27)
ふところ手　三六(15)
五三(52)　一〇七(38)　四七(50)　五三(53)
不足
二人連れ　五三(51)
不良少女　五五(58)
憤慨　五九(52)
二人　一八三(16)　一九六(17)
筆不精　一八六(18)
老ケ役　一九〇(20)
札附き　一九〇(22)
伏目　一九三(27)
婦人會　一九五(18)
父兄會　一九六(17)
父性愛　三〇一(23)
不孝者　三〇八(32)
夫婦　三一四(34)
G
眼病　四(16)　一七一(14)　三〇七(28)
行列　一五(11)　五三(55)　一八九(17)
合宿　三六(62)
月給　三九(44)　五〇(55)　一九〇(24)
行水　四三(51)　五七(54)　一八八(16)　一八九(18)
後家　四八(61)

食料品賣場で紳士鱈を買ひ　奈良縣　小谷華素兒
ヘツドライトの黑布もしかと實戰下　同
大任を果して解いた卷脚絆　滿洲　西垣　錦風

内地初空襲

空襲へ咬え煙草を地にぶつけ　同
總選擧捨身ですとは皆言へど　小郡　岩崎　勇記
鯉幟英米を呑む口をあけ　同
子も何時か貯金の高を知つてゐる　大阪　山田青々子
子は親の零す飯粒見逃さず　同
宿を出てまつすぐに來た二重橋　西宮　谷口　寒草
嫁きおくれ別に氣にしておらぬやう　同

帝都空襲を受く

一億の眼には敵機も蠅と見え　大牟田　濱本　邦夫
模型機と走れ〳〵の春の空　同　堀　京美
お面一本取つて大きく呼吸する　大牟田

無敵海軍の陣容

國際將棋ヤグラ圍ひの鮮さ　同
鯉幟國に捧げる子が生れ　香川縣　早馬　清富
歩を一つ持つてアメリカ王手と來　同
競市の名家名家とたたき賣り　大阪　中西　彌生
鬚そればみにくい男でないものを　同
行きちがふ義手の手袋白過ぎて　大阪　奥村正太郎
欄外の標語聖戰下の會誌　同
捕虜も汗兵も汗壕出來上り　○○にて　住岡　義一
敵兵の逃げた兵舍にハイヒール　同　千代　留
輸送船前の船から暮れかゝり　同　南要兒
遙拜の東天今朝は廻れ右　同
彈丸運ぶ兵を水牛見て居たり
俯向いてぢつと自然に逆らはず

大東亞戰爭最初の空襲をうけて

さあ來いと火叩きむしろ水を吸ひ　大阪　山本　葉光

C・Y子嫁ぐ

嫁ぐ娘の退社屆も書いてやり　同
新米はぐら〳〵の椅子に腰をかけ　松江　本庄煎茶人
機關士は夕日を浴びて御出勤　同

司法保護事業に寄す

かざりなき保護へはるかな灯を感ず　長野　堀内　敏郎
何んとなく泣けて新芽の河岸に佇ち　同
よい月に自轉車押して歸るなり　大阪　東方　鷹丸
貰ひ風呂風邪引きましたとも言へず　同
滿員を巧みに拔けて車掌ゐる　大牟田　池田　有明
隣の娘職場で會へば器量よし　同
藥湯で日露の手柄話聽く　大阪　内田　掬夫
百點が二枚ですんだお嫁入り　同
見下せば川邊は若さ謳ふとこ　大阪　森川　九一
花見酒いつか角立つことを云ひ　同
給料生お酒の味を未だ知らず　大阪　木下　幽王
チョンマゲを切つた心の配給所　同
社の爲の意見がもとで首になり　神戸　湯淺小城子
轉職の日を圍まれる子澤山　同
春の陽へ猫背の靴屋よく儲け　神戸　市川　治男
まんざらでない見合には笑ふだけ　同
臨時ニュース濟んで商談やり直し　大阪　齋藤　三丸
氣の利かぬ客へ炊事場あわて氣味　同
獨り言いひつゝどみ屋開けて行き　大阪　橋口　松嵐
櫻咲く國の人ゆへ自爆出來　同
血で石油、換算するも過去のこと　山口縣小郡町　長野　井蛙
長話、よせとも言へず時計卷く　同
武士道を信じて日語もう覺え　布施　祝元　春實
警報もなく開票のラヂオ待つ　同

空襲

持駒も無いのに小癪な王手と來　愛媛縣　木村　棟友

元氣　酉(55)三〇一(22)
愚痴　五七(45)一八七(18)
外人　七一(33)
疑問　九五(40)
凱歌　一八五(16)
軍國の娘　一八五(16)
軍人　一八六(19)
元祖　一八九(17)
凱旋　一九三(18)
號令　一九三(18)
外出　一九八(22)
議論　二〇三(23)
逆境　二〇三(18)
頑張り　二〇七(31)
學生　二〇七(34)
學歷　二一三(1)
癌　二一五(33)
强情　二一五(34)

H

髭　二(23)　四三(45)　四五(56)　二五(62)　一八三(13)　二五(34)
素見　五(13)
奉公　六(17)
日やけ　七(13)　二〇〇(22)
發展　九(14)　二〇三(23)
薄情　一〇(9)　五六(45)　一六六(16)　二四(33)
放火　一一(15)
人混み　一五(13)
人妻　一六(15)　二六(24)
初戀　一九(8)　酉(49)　酉(55)　一八三(16)　一四(16)
保護願　二〇(19)

父死去

六十七年の喜怒哀樂の幕を引く　名古屋　八幡　勿來
出征して、バナ、が食べたい綴方　同
海軍省許可敵艦に死期迫る煙　同
朝霧に山は現像されてゆく　松山　山本耕一路
新聞屑花崗石じみ草の中　大阪　野村　寫王
拗ねてみるだけで嬉しい病み上り　兵庫縣　吉本　尙代
戰はぬ北の守りもありますぞ　兵庫縣　谷口　秋水
湯屋の義理知人の背を流すなり　大阪　山本　龍泉
風呂屋とも今夜でお別れ召集兵　神戸　若柳　青峰
自轉車の追ひつ追はれつ歸るなり　大阪　田川　迷
銀輪で越えたマレーをふりかへり

出雲巡禮の四月

巡禮の出雲　櫻のこぼれよう　石見　田中　弘樓
ノーストップ木炭ガスを振撒いて　大阪　中島　晩成
地球上のルンペンもオランダの心がら　長野縣　佐二木千隈
二重窓目張りをとれば春の風　滿洲　大坂清一郎
靈峰富士山陰線は晴れてゐる　松江　岡崎　祥月
弟は銃だが俺はハンマーだ　松江　大和　太郎
軍神の家の櫻も咲き匂ふ　松江　宮森　品枝
流行のなんのと認識不足なり　松江　横地　初惠
男子ならとはやるせなき願ひなり　名古屋　松井　靜子
雨よ降れ風よ吹け凡人老ひ易し　松山　沖原　綠風
殘置燈今日あり無事を誇るよう　名古屋　前田　秋暮
お稽古の戻りお好燒へ立ち　大阪　八田　鎭生
石段に同じ祈りの人續き　松山　平岡　菱三
散華する勇士へ花は見とられぬ　廣島　久保田可學
嫁き後れ同窓會誌を淋しく見　佳木斯　安田梧一路

米機來襲

投彈しては見たが堅きに齒がたゝず　大阪　池水　湖心
結婚に體力章が物を言ひ　岡山　露野　蘭
更生車女の客で道をより　津山　丸尾　青嵐
甘黨へかはつてからは圓い父　京都　奥田　杜的

禮詣り

出雲大社に仲のえゝとこ見てもらを　伊丹　岩井　泉
誰よりも返事が早し新任者　兵庫縣　小林かづさ
公德の一列に居て乘り遲れ　諏訪　牛山　臥牛
東內隣組でおばあさんにされ　大阪　谷崎　一昌
選擧場墨をゆつくりすつてみる　津山　二宗　吟平
屑野菜塵箱の外に花も咲き　岡山　萱原　秋帆

英印會談失敗

土嚢の代りは眞平御免です　大阪　永田六龍子
出產へ今日から父として稼ぎ　大牟田　平島　平人

四月十八日米機來襲

突いて來た成歩は輕く拂はれる　大牟田　堀　京美
かくまでにして逃げたいか米英よ　南方　掛飛　吉宣

★近作柳樽欄の選句について

雜吟は難しいといふ聲をよく聞かされるが、雜吟が作れないといふことは川柳といふものは斯んなものだといふ型で句をつくる人の言葉で、ホントの川柳と云へば雜吟の外にはない筈であることを忘れてゐるのである。

作者が心からものをいふ。それが川柳の型式とリズムを秀して行はれるのである。誰でも云ひたいことをもつてゐる筈だ。その言ひたいことを、そつと棚にしまつて置いて、課題で川柳を探がしてゐるといふ作句態度はいい加減に棄てなければならぬ。

課題吟は作句の練習であるから、作句の練習句に自信が出來たら雜吟に努力しなければいけない。難しいと云つて作らなければ　ますます難しくなるに違ひない。作句に思込みは禁物だ。選者はその作家のパイロットとして最大の注意を怠つてはいない積りだ。一層の努力を期待してゐる。

肌　三三(21)
鉢巻　三三(22)　四八(66)
人いきれ　二四(16)
人出　四四(51)一九〇(22)
平凡　三五(21)二〇四(36)
三三(33)
煩悶　二九(33)　四三(52)
皮肉　三〇(33)
花見　四〇(34)　五一(51)
五三(49)二二(43)
花の留守　五三(51)一五五(17)
犯人　四四(51)一九九(22)
晝寢　四四(55)　五四(32)
一九九(22)三三(32)
裸　四五(54)一九九(20)
二〇〇(22)三三(31)
一人寢　四七(45)
秘密　四八(65)　七九(63)
一九四(15)
齒莖　四九(53)
初詣　四九(55)
訪問　四九(56)一八四(16)
三二(32)
はにかみ　五〇(56)
腹　五三(51)一六一(18)
一九三(19)三三(34)
人通り　五三(52)
避暑　五六(45)三〇一(22)
一人者　五七(50)
保證人　五八(39)
敗戰　五八(45)
奉祝　五九(15)　五九(44)
五九(46)
黑子　五九(51)
白痴　六六(35)三〇一(23)
三〇三(23)

—二六頁上段へ續く—

初等川柳講座（五）

麻生路郎

川柳と俳句とどう違ふか

川柳と俳句と、どう違ふかといふことをよく訊かれることがあります。斯ういふ質問をする人は俳句に手を染めた經驗のある人か、父や兄が俳句を作つてゐたので、俳句なら少しは解つてゐると思つてゐられる方であります。

難しく云へば、川柳を作りたいといふ人がこんな質問をして、俳句と川柳と、どんな點が似てゐるとか、違つてゐるとか、云つて見たところで、それは一つの知識ではありませうが、それが作句上に役立つといふほどのものではありません。しかし、よく訊かれる質問でありますから、極く平易に解說しておくのも無駄ではないでせう。

形式の點から云へば、川柳も俳句も同じく十七音字中心の短詩でありますが、用語が俳句の方は韻文であり、川柳の方は主として平言俗語であるため一讀した時に、形式まで違つてゐるのではないかと思はれるほど違つた感じがいたします。たしかに袴と着流し位な相違が感じられます。その何れが、いいとか悪るいかと云つてゐるのではないのであります。又云へもしないのであります。ただ一方には少しくかたくるしいところがあり、一方には極くくだけたところがあるといふ風にうけとれるのであります。それは使用される文字や語齣の相違から、表現上異なつた音律を生じるからであります。

それに俳句の方では切字といふ約束があります。「や」「かな」はいけないとか「や」「けり」はいけないとか云つて表現上に幾多の束縛があります。「春の海」だとか「夏の月」だとかいふ季感をとり入れた季題といふものもあります。一人前の俳句が作れるまでには、そうした一ト通りの約束をのみこまねばならないのであります。

何故切字がいけないのか、季感を入れねばいけないのかと云ふやうなことは、俳書について研究されれば判ることですから、ここでは省略いたします。兎に角

春の海ひねもすのたりのたりかな

といふ風に「春の海」といふ季題をとり入れてつくらねばならないのでありますが、川柳の方では切れ字がどうの、季感を入れねばいけないのといふやうな約束は一切ないのであります。と云ふ譯ですから季感を入れやうと、俳句の季題と見るべき用語を其のままとり入れやうと一向差支ないのであります。しかし、それ等の用語を下手に使用すれば川柳とも俳句ともつかぬ鵺式な句が出來てかへりみられぬだけであります。つまり川柳では表現上かなりな自由さがあるのであります。しかしそれもかなりなであつて、無制限に自由である筈はないのであります。川柳には川柳としての約束があるが俳句のやうな切字や季題の束縛はうけないといふのであります。ここで一寸ことわつておかねばならぬのは一概に俳句と云つても、ここに例に擧げたやうな、定型律の俳句でなく、自由律の俳句を作つてゐる人たちもあれば、又無季の俳句を作つてゐる人たちもあるといふことであります。しかし、それ等の人たちの作品のよしあしは別として、數に於ては問題でないのでここに云ふ俳句とは特にことわらない限りは定型派の句について述べてゐるものと思つていただきたいのであります。川柳に於ても矢張り定型派の川柳についてであることは云ふまでもありません。

川柳、俳句ともに一行詩でありますが、俳句は「古池や」と「蛙とび込む水の音」の如く二つの觀念に分けることが出來るが、川柳は「よく寢れば寢るとて覗く枕蜘」の如く詠まれて、二觀念に分つことが出來ぬから、俳句は二呼吸詩であり、川柳は一呼吸詩であるといふ風に分類してゐる人もあります。これにも例外のあることは云ふまでもないのでありますが、そういふ分け方もあるといふことを述べたのであります。

川柳と俳句の姿について話すとすれば、勢ひ、その生ひたちについても、少しく述べる必要があると思ひます。尤も川柳の起原については別講で詳しく說くことにいたしますから、ここではホンの略歷程度にとどめておきます。俳句については俳書によつて見ていただくことは云ふまでもありません。

川柳は繼歌から連歌、連歌から俳諧、俳諧から前句附、前句附から川柳が生れたとされてゐるのであります。つまり前句附の附句を獨立させ、一句建として句意の解せられるものを、分離させたのにはじまり、遂にはじめから一句建としてつくるやうになつたものであります。

例へば

味事なりけり　味事なりけり

と云ふ前句に

要際のこしてさつと海に落ち

と附句をする其の附句を前句と切り離して見ても奈須の與市の故事が髣髴として思ひうかべることが出來るので、遂に前句を拔きにして作り出したのが川柳なのであります。

では、俳句はどうかと云へば、俳諧の發句、つまり首句を獨立させて句意の解せられるものを發句と稱したのでありますが、子規一派が舊派の月並發句と區別する便宜上、俳句と稱するやうになつたのであります。尤も俳句といふ文字は子規派の創作ではなく古くからある用語だといふことであります。

川柳といひ、俳句と呼んで居りますが、ズツと遡れば同じ家から出てゐるのであります。しかし、同じ家から出てゐるからと云つて、柳俳無差別論を稱へる人もありますがそういふ人達はものの發達とか進化とかいふことを無視してゐる譯でありますから、論ずるに足らないのであります。

現在、俳句はどこまでも俳句でありますし、川柳は何處までも川柳であります。川柳には川柳のよさがあり、俳句には俳句のよさがあるのであります。川柳は俳諧の滑稽味を傳統的に生かし、俳句は芭蕉の正風によつて、「わび」とか、「さび」とかを生かす短詩となつて、それぞれの道を歩みつづけてゐるのであります。本筋から見れば途中の道草的な變遷と、枝葉的な傾向までここで述べる必要はありますまい。甚だ簡單ではありますけれども、川柳と俳句とは右に述べたやうな柳歴と俳歴をもつてゐるのでありますから、同一の內容にまで歩み寄らぬ限り柳俳無差別論はなりたたぬのであります。しかし相接した二者の判別はなか〳〵容易ではないのであります。そのことについてはあとで詳しく說くことといたし、次ぎに內容方面について、たとへ大雜把であらうとも述べて見ませう。

內容を極く大別して、川柳は主として人事を、俳句は主として自然を詠むものだとされてゐますが、勿論川柳も自然を詠むし、俳句も人事を詠んで居ります。しかし、川柳の自然を詠んだ句には、どつかに人間臭ささがあり、俳句の人事には何んとなく人間味の稀薄さを感じさせられるのであります。

例へば、しげるの川柳に、

海岸の松は逃げ出す姿なり

といふ句があります。これなどは自然の寫生ではありますが、擬人法によつて人間臭を歴然と出して居ります。

芭蕉の俳句に

清瀧や淚にちりこむ青松葉

と云ふのがありますが、同じ松を詠んでも、川柳と俳句では斯うも違ふものかと思はされるほど人間の匂ひがしないのであります。

川柳では青明の

もう歸れ歸れと花の寺は鳴り

にいたしましても、滿潮の

ほととぎす節季を逃げて來た男

にいたしましても、花の寺を詠み、ほととぎすを詠んでゐるのではありますが、何處までも、人間が首を擡げてゐるのであります。

これと反對に俳句の人事句といたしまして、正岡子規の

嫁入りて餘所の砧ぞ打ちにくき

などを見ますと、まことになまぬるい感じがするのであります。尤もそのなまぬるいところに美しさを感ずるのであると云はれれば、云ふべき言葉を知らないのではありますが、同じ砧を詠んでも、古川柳は

貧ひ乳にかはる砧の力過ぎ

と、力强く人情味を出して居ります。

子規の

口紅や四十の顏も松の內

よりも、古川柳の

松の內わが女房にちつと惚れ

に團扇をあげたいのであります。人事の句に至つては俳句は到底川柳の敵ではないと思ふものであります。川柳の鋭く突込む心理描寫に至つては全く俳句では詠み得ないものがあるのであります。

一文字の

戀人を逃すまいとて嘘をつく

だの、古川柳の

母の手を握つてこたつしまはれる

指のない尼を笑へば笑ふのみ

汝等は何を笑うと隱居の屁

の如きに至つてはどうだどうだと云ひたいのであります。

しかし、斯う申したからとて、俳句には俳句のよさがあることを忘れて、徒らに罵つてゐるのではないのであります。俳句の自然描寫には川柳の遠く及び難いところがあるのであります。そこに川柳と俳句とのものの觀方、摑み方の上に違つてゐることを知らなければなりません。俳句は理屈を嫌ひます。そこには素直な描寫があります。川柳はどんなに素直に物を觀やうとしても、そこに直觀的に、電光的に理智が働いて居ります。しかし、これあるがために川柳は川柳の息吹きをしてゐるのでありますが、餘りにも理智が働き過ぎますと理窟一べんの句として棄ててかへりみられぬのであります。その間のけじめはまことに難しいのであります。

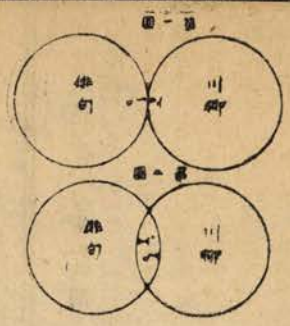
次ぎに川柳と俳句との繩張りについて圖解で說明を試みやうと思ひます。動物であるか、植物であるかさへ二者の接觸したところでは見分けがつかないやうに、川柳に於ても、これは川柳であるか、俳句であるかと訊かれて、これは川柳です、これは俳句ですと、云ひ切れない句があるのであります。しかし、その區別がつきかねるからと云つて川柳と俳句が同じだとは云へないことは前述の通りであります。

假りに第一圖の如く、川柳の圓と俳句の圓とがあつて川柳のイ點と俳句のロ點と相隣合つてゐるといたします。こ

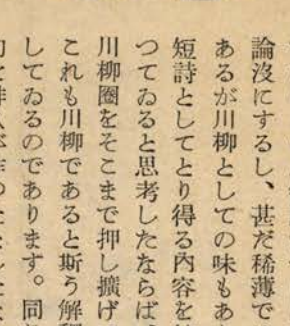
の場合この二接觸點の句は川柳であるか、俳句であるか、一見して見分けがつかないのであります。

更に第二圖の如く、川柳のイ″點が俳句の圓の中へ押し擴がつて行つたとして、その部分の句は、もう川柳ではなく俳句なのか。反對に、俳句のロ″點が川柳の圓の中に押し擴がつて行つたとして、その部分の句は、もう俳句ではなく川柳なのかといふ疑問が生ずるであらうと思ひます。川柳の圓と俳句の圓とが圖で示してゐるやうにハツキリと區別し得られるものであれば、闖入者即ち俳句の圓の中のイ″の部分はたとへ川柳人の作品であつても俳句であり、川柳の圓の中のロ″の部分はたとへ俳人の作品であつても、川柳であると云へるので何等疑問は生じないでありますが、これを實際問題にうつして考へますと、川柳人にしても、俳人にしても、知らず〳〵相手方の領域を侵してゐる場合があるのであります。

第一圖



第二圖



そうした事實にぶつつかつた時に、選者の地位に立たされてどう處置をしてゐるかと云へば、ハツキリそれが川柳でないといふ判斷がつけば勿論沒にするし、甚だ稀薄ではあるが川柳としての味もあり短詩としてとり得る內容を持つてゐると思考したならば、川柳圈をそこまで押し擴げてこれも川柳であると斯う解釋してゐるのであります。同じ句を俳人が作つたとしたならば、勿論それは俳句圈の擴大で、俳句として取扱はれる譯であります。つまりどちらとも判斷しかねる句は川柳人がつくれば川柳として扱はれ、俳人が作れば俳句として扱はれる譯であります。

尤も表現が川柳的であるか俳句的であるかといふことさへ區別のつかない場合のことであることは云ふまでもありません。

この判斷を妥當にさせるための便法として地圖に例をとりたいと思ひます。

私たちの考へ方では地圖といふものは、相接してゐる兩國が協定して線を引いてゐるのであるから、地圖の示してゐる通りであつて全く固定したものと考へてゐたのでありますが、これを實際問題として考へると、その境界線は日日動いてゐるのであります。假りに滿洲國の兵隊がソ聯の方へ一歩前進すれば、滿洲國はそれだけ地圖よりも押し擴がつてゐる譯であります。

地圖はどうあらうとも、實際問題として、そこは滿洲國だと云へます。尤も國際法だとかいふやうな法規でどう規定してあらうと、そんな法規を除外しての話であります。單に兩國の國境は地圖とは別に日日動いてゐるものだといふ解釋をして川柳と俳句との境界線の比喩に使用したのに過ぎないのであります。

これで川柳と俳句と、どう違うかといふことを大體說明したつもりであります。

Sata Special Klinik
呼吸器病科
診療 毎日
內科
醫學博士 佐多愛彥 電北38
醫學博士 加藤謙一
醫學博士 螺良四郎 電尼崎1151
市電堂島中町停留所北辻西入
佐多醫院
大阪堂島北町 電北八二八四

——神戸から大阪へ
大阪から神戸へ——
待たずに乘れる
阪神電車

月評 足跡

路郎・葭乃
豆秋・アート

裁く人の身にも寒かろ朝の雪　（敏郎）

葭乃＝「雪の朝あれも人の子撫拾ひ」と云ふ有名な俳句がありますが、あれと同じやうな境地で、これは裁判官に同情した句です。法をもつて厳しく人の罪を裁くのではありますが、人情として掟通りに裁けない事もあるだらうし、裁く人の身になつてみれば、さぞ辛からうと同情した句です。この「朝の雪」と云つたところ、何んだか俳句の用語みたいな氣がしますネ。

豆秋＝これは然し、珍しい句ですネ……裁判官と云うと大抵の場合、同情をしられないがちで、少し腕が利き過ぎると直ぐに鬼といふ字を附けて鬼検事とか云ふ、さうした割の悪い立場の人へ同情を寄せた句として珍しいと思ひます。「裁く人の」で六音字になつてはゐるが、別に耳ざわりではない。

アート＝裁く人の身に思ひ遣りの情を寄せた句と解しても佳い句ではあるが、單に感じの句として、そのまま受け取つても優れた句だと思ひます。

豆秋＝この句と同時に發表されてゐる他の二句も裁判の句ですネ。傍聽にでも行つて作つたものと見えます。

葭乃＝この句は前行二句を總括した句とも云へます。それから此の句は人に同情を寄せた句で道徳的川柳とでも云ひませうか、これに類した句として、

これ白髪母の頭だもう生えな　（一昌）

と云ふのを擧げることが出來ますが、この句に就いて豆秋さんに御意見を伺ひたいものです。

豆秋＝人道派の川柳とでも云ひませうか、千代女の俳句を聯想さすやうな愛情があります。「これ白髪」と擬人法で表現したことは作者の腕でせう。

葭乃＝古句の「これ小判たつた一晩ゐてくれろ」と表現法は同じであるが、古句の方は金に對する執着心を表し、この句では母を思ふ孝心が濃やかに表されてゐる。内容に於て何れが優れてゐるかは讀む人の境遇の如何に據るでせう。

路郎＝あの啄木の「戯れに母を脊負ひてそのあまり輕ろきに泣きて三歩あゆまず」を聯想するネ。然し啄木の歌は「三歩あゆまず」など、技巧の匂ひが強い。その意味からセンチな歌だとも云へるが、この句の方はそれに比べて、母を思ふ氣持が素直に出てゐていゝと思ふ。

葭乃＝啄木さんのあの歌は殊に表現もナチュラルでない。そんな悪い歌を、ことさらに此處へ拾ひあげて來たのは氣の毒な話だけれど……

路郎＝別に僕は氣の毒だと思はないネ。この歌が表現技巧上に臭味があつたところで、啄木の歌の總てを抹殺してゐる譯では無し、啄木には啄木としての優れた歌は幾らでもある譯で、母に對する孝養を詠むだ共通點から偶々、聯想したのに過ぎないのである。而もその「三歩あゆまず」と云ふやうな限定的なゆき方は從來の歌の畠ではなくて、寧ろ古川柳のあまり好ましくない表現技巧によつてゐると云ふことも思はされる。

「イエス」「イエス」「イエス」とシ港明渡し　（桑城）

別れた日あの日鷗も啼いてゐた　（神風）

葭乃＝一番目の句は只シ港を明渡したと云ふだけの内容、二番目の句は別れた日に鷗が啼いてゐたといふ内容で、どちらも單純な句ではあるが「イエス」「イエス」「イエス」と同じ言葉を繰り返し、また一方は「別れた日あの日」と斯う繰り返して疊みかけてある調子が、一種の魅力を産むのだと考へます。

路郎＝いま「イエス」「イエス」「イエス」の句が單純な内容のやうに言はれたが、これは決して單純な内容ではない。寧ろ非常に深刻な内容を持つてゐる句である。表現方法としても、シンガポール明渡しの情景を此の短い詩形の中に充分に表してゐる點を稱揚したい。この「イエス」を三つも重ねてゐるが敗軍の將としては言ひたくない「イエス」であり、寧ろ心の中では「ノー」と叫んでゐる氣持までが出てゐると思ふ。この「イエス」を言つてゐる敗軍の將の顏色憔悴としてゐるさまでが想像に難くない。

豆秋＝えらい迫力のある句ですネ。

路郎＝で後の句、これは成程「別れた日あの日」と重ねたために句意を強めてゐると云ふことは云ひ得るが、句そのものゝ内容は感傷的であつて前句の「イエス」「イエス」の強さには及ぶ可くもない。

花が散る夜櫻なればさびしからず　（不水）

豆秋＝この句には「花が散る夜櫻」など、餘分な文字があ

り、また「さびしからず」で六音字になつてゐたりするので、何んとか改作してみやうと試みましたが、どうしても感じが變つて了うので匙を擲げました。字餘りであり、冗長な文字があるやうに思はれるけれども、この句は素直に感じを表して居り、却つて下手な手術をすると、盲腸を切り損つて殺して了ふ恰好になると思ひました。

アート＝と云ふのは、花と櫻が重つたり、下の齣が六音字になつてゐるところにこそ、此の句の感じが宿つてゐるといふのですネ。

路郎＝どちらかと云うと不水君は句の形とか、さう云つたものに煩はされないで、自分の感じた事を素直に押し出すと云ふ特徴を持つてゐるが、この句もやはりその一種であつて、「花が散る」と先づ情景を投げ出したやうに表現して、その花なるものは夜櫻である、他の花であるならば「花が散る」と云つただけでも淋しさが犇々と迫つてくるべき筈だのに、夜櫻であるために或る華やかさは感じられても、ちつとも淋しい氣持にならない、と言ひ斷つてゐるところに此の句の味が出てゐると思ふ。そして「淋しからず」と強く言ひ切つた此の手法には間隙がない。

豆秋＝不水さんの性格がよく出てゐるんですネ。

藝なしが詩吟を習ふことにする　（栞）

豆秋＝時節柄を把んで、而も川柳らしいほゝ笑みを感じさせる佳句だと思ひます。

葭乃＝藝なしが習ふだけに詩吟と云ふものは外の唄ほど節廻しも、さほど難しくないやうに思へる。どんなに下手でも……

路郎＝淨瑠璃には聞こえン（笑聲）

葭乃＝どんなに下手でも兎に角、詩吟やなアと思うて貰へるので、無器用な者が取ツ着き易い藝であると云ふことを此の句で表現してゐる。

豆秋＝健全慰樂としての効用と云ふ點で、詩吟は今や藝の王座を占めてゐる觀があり、銃後川柳として何時までもモンペーや千人針あたりを低迷してゐないで、詩吟と云ふやうな題材を掴んだのは作者の慧眼である。

路郎＝自分の不器用さを知つてゐる人間が、何をやつても巧くいかんが詩吟なら儂にでもやれるやらう、ひよつとしたら放送に出てくれと云はれる位にやれさうな氣がしてゐる人の心狀を掴んだユーモラスな句である。なんでもないやうな表現でありながら、その間の消息を巧く穿つてゐる。

豆秋＝上手下手の胡麻化しが利く點で詩吟を撰擇したとも見えて面白い。

路郎＝しかし、本人は大して巧いとは思はないでも、腹が減つて健康上よいとか、なんとか理窟をつけてゐる顏が見えるやうである。

おやおやなんどと子供がませてくる　（綠　巢）

路郎＝綠巢君の句はなかなか面白い。「純綿のおむつ社務所へ忘れて來」とか「坊さんが信號無視をして行つた」なんかネ……。

豆秋＝子を持つ親たる者、大いに注意しなければならん。迂つかりすると闇取引の遊びごとなんかもやりかねん。然し內心は親の喜ぶ顏なぞが此の句から覗いてゐるやうな氣もする。リズムも大變いゝやうである。

路郎＝「おやおや」などと云ふやうな言葉を連發する家庭がよく出てゐる。句の表の子供よりも母親などの方がはつきり出てゐるところに、この句の面白味がある。この「おやおや」を連發する母親は、同じ作者の「純綿のおむつ社務所へ忘れて來」の純綿のおむつを振り廻すやうな母親であると思ふ。

豆秋＝爪なんか染めとる母親ですなア。

ものの具の一つ白旗あると見え　（水　車）

豆秋＝「ものの具の一つ」と大きく出たところが面白い。實際あちらでは出征する時に恰度、日本の千人針のやうに白旗を持たして出發さすのぢやないでせうか。

路郎＝まさかさうではあるまいと思ふが、兎に角、香港の陷落と云ひ、星港の陷落と云ひ、物々しく大きな白旗を押したててハイキングでもやつてゐるやうに見えるのは、我々日本人の想像し得られないものの一つに違ひない。

豆秋＝シンガポールのなんか、あれは敷布と違ふんでせうか…（笑）

路郎＝まあ敷布かカーテンを繼ぎ合はして造つたものだらう。でないと如何に持てる國と雖も白旗までちやんと準備してゐるとは思へない。新聞で見た寫眞の白旗は人間との比例から考へても、隨分大きなものであつた。

こりや斯うですと旦那がへこまされ　（恒　明）

路郎＝ながい間、自由經濟で生きて來た旦那である。なかなか統制經濟と云ふのが呑み込めない。國策に、旦那と雖も反對する氣は少しもないのであるが、呑み込みが悪いために、ヘマをやつては使つてゐる人達にヘコマサレ通しで頗る器量を下げたさまが此の句によく出てゐる。

豆秋＝實際、いまどき頭の古い旦那の命令通りにやつてゐたら統制違反許りになる。時代にとり殘されかゝつた旦那の悲哀なども出てをる。

（アート筆記）

―二〇頁下段の續き―
保護 七六(43)
白狀 九四(42)
表情 九六(37)
瞳 一一五(65)
膝 一一三(51)
ヒステリー 一八〇(22)一八九(10)
兵隊 一八〇(12)一八一(13)
一一三(33)一八五(16)
引越 一八三(16)
繁昌 一八三(16)
引拔 一八四(17)
生え際 一八四(15)
肺 一八六(20)
表札 一八六(19)
獨り言 一八七(16)
評判 一八八(20)
張合ひ 一八九(17)
左 一八九(17)
八卦 一九一(16)
禿 一九二(27)
話 一九三(18)
花嫁 一九三(20)
鼻 一九三(19)
本心 一九四(15)
一人 一九四(16)
拍子 一九五(17)
人前 一九五(18)
久し振 一九七(22)
左り前 一九九(22)
二十歳代 一九九(23)
ヒットラー 二〇〇(23)
破産 二〇一(21)
表彰 二〇二(22)
日歸り 二〇五(30)
疲勞 二〇八(32)
墓參り 二〇八(32)二一(32)

昔の川柳に現はれた

日本刀

前田五健

刀と申しますと二尺以上のもので一尺七八寸以上二尺迄を大脇差と云ひ一尺三四寸から一尺七八寸位迄を脇差、一尺以上一尺三寸位までを小脇差、一尺以下を短刀と稱して居ります。

世間ではこれを總稱して刀と稱し、古い川柳などには全くその作者の故もありませうが、どうも刀について、キツパリした川柳が見當らぬのはいさゝか物足らぬ感が致します。和歌とか俳句には流石にいゝのがあります。國民皆兵の秋、私等川柳人として、時代に沿つた刀の川柳を遺したいものと存じます。

元來よく床の間に龍と虎の軸をかけますが、承るところによれば龍は武で虎は文を表はしたものださうであります。即ち龍は陰る時は地下に潜み、動く時は雲を呼び天に現はる。又戰ふ時は首尾共に活躍して震ふ時には天地も崩る勢あり。一劍鞘に潜む時は靜かなれど鞘を拂へば活殺自在の一心劍、破邪顯正の結を採ると說いてあります。

劍とは刀を背中合せにクツつけますと先の尖つた兩刃の型になります。これが劍で太刀と刀脇差と小太刀とは寸尺上からは殆んど全く同じでありましてたゞ、刀の差裏に作者銘があるのが太刀で脇差の同じく差うらに銘を入れたのが小太刀、太刀も小太刀も刃を下にして佩く、現代の將校が提げて居る……あのまん中あたりからグツト、上へ引きつけて佩く、これが太刀であります。刀は刃を上に向けて差します、尤も足利時代以前は、この銘の入れかたが、いろ〳〵であります。これは太刀だけを佩いた關係から斯くなつたものと思はれます。

大體以上の樣な事を頭に入れて置いて川柳しないと妙なものが出來、作者を笑はれる事になるかも知れません、それは現代人は日本刀に非常な愛着心と氣をつけて居りますからであります。竹刀でなく日本刀で實際的に武を練れと申して居る時代でありますから少年でも知つて居るかも知れません。川柳するにもうつかり出來ません。

そこで昔の川柳を見ると、どうもピツタリ來ない、刀をチヤラかした氣味があつたり武士階級に對立する町人の心が刀を通して、その時代ならゆるされるが、現代から見ると、情けない氣も起りさうです。私等が川柳する上に於てよい藥になります。いや、よい參考になり如何に川柳が時代時勢の息吹をして居るかをハツキリと感ぜしめられます一面から云へば、これでこそ川柳の價値があるのでありませう。

正宗で甚だもめる形見わけ

おてかけの弟、正宗差して居る

これは、正宗を使つての川柳でありますが、正宗の名が泣きさうです、正宗については、種々の說がありますが省略致します。次は

宗匠は仲間の知らぬ手間をいれ

相槌が來ると宗匠ゾツトする

御承知の三條小鍛冶宗近が

花形 二九(33)
左手 二九(32)
臍繰り 二〇(30)二一(31)二一(34)二三(33)二四(32)
冷汗 二一(33)
人影 二二(30)
流連 三一(18)五二(53)
悪戯 五一(14)五九(50)一五九(39)
家出 七(20)六七(48)
息 八(15)二五(56)四〇(46)
陰氣 一〇(12)
胃病 三一(17)三二(32)
胃弱 四六(52)
命 二九(21)五〇(55)
入墨 三四(15)
色男 三九(43)五三(56)五六(48)
意氣 四五(57)
稲刈 四五(58)
一生 四六(46)
意地 五一(55)
言譯 五三(52)一九三(24)
居眠り 五五(36)五六(45)一八(17)
入齒 五六(31)一八(19)
許婚 一八(18)一九(17)一〇(31)
慰問 一八二(19)
痛手 一九〇(22)
祈る 一九一(17)
印象 一四一(15)
インチキ 一九五(19)
暇乞 一九六(19)一九七(21)
見 一〇〇(23)一〇三(19)
意遺 二一〇(32)
インテリ 二二(33)

稲荷さんと銀刀したところであります。お芝居、謠曲、などから採材したものでせう。

其他、刀に關しては

化け物の部に入れて居る

お差料　（義弘の刀）

汐時を一度は太刀で狂はせる　（新田義貞）

二位殿は我物顔に一本さし　（壇の浦）

お刀も氣も短かいに長袴　（内匠頭…狂句）

師走の飛脚長い脇差

山伏の刀りゝしき春の空

野雪隠地藏しばらく刀番

火の中で氷の出來る刀銀冶　（狂句）

波の平浮きつ沈みつ御不勝手　（同）

以上の樣なものが眼にかゝりましたが、此の外にも刀に關しては相當あるだらうと思ひますけれど、此の時代の川柳は刀に對し觀念が違つて居るのですから致方はありません。

これ等にくらべますと、現代は流石に各所で出題される日本刀の川柳を見ても、全く觀念が違つて來てそれが表現されて居りますから嬉しくも有難い事であります。

神代の刀劍、國常立命の天のぬぼこ、伊ざなぎ、伊ざなみの神の十束の劍、素盞嗚命の叢雲の刀、大國主命の八廣矛等尊いものは別と致しましても、延喜より元暦までの名刀、天慶の亂將門の戰に直刀から反刀に轉換した實戰由來さては永延年間一條天皇の御代、山城の宗近、備前の友成さては弘安頃までの名刀續出後鳥羽天皇御世の御番銀冶より降つて建武年間前後の鎌倉銀冶、正宗貞宗の名工續出、應永、應仁足利末期戰國時代に村正の出現…正宗と大變時代が違ひますのに、正宗の弟子の村正なんてよく申して居りますがお笑ひものであります。村正より宗長、秋廣、兼元（孫六）光忠、重光の出現應仁より慶長即ち織田豐臣時代の名刀名工談、德川時代に成つて、所謂新刀時代になりまして江戸中心に攝津、肥前山城等に名工が出る名刀が出る、その歴史と傳說でも、日本刀は實に日本歴史上にとつても、大きな柱石をなして居ります。

まあ、こんな日本刀觀で、日本刀の川柳を作ると、自然と力の入つた川柳日本刀が出來ようかと存じます。和歌、俳句、詩で日本刀を詠じた如く、川柳でも必ず平易語でこの神器……刀工は技術のみでなく、精神第一で鍛へて居ます、刀工の信念が刀に打込まれて表現される、尊い歴史やら傳說も、この刀工の精神とそれを使ふ人と、日本歴史と三位一體で『刀を魂とし馬を寶とする』あの刀を魂とする神器と成る譯でありまして、他の文藝に劣らぬ日本刀川柳が出來るものと存じます。刀に關する昔の川柳の不感心を一つ拂ひ清めて、イ、日本刀川柳を見せて戴きたいと念願致して居ります。愛刀家が刀を觀る心は、刀と一體になる心で、これを『刀念』とも申し、又た刀の魂をも『刀念』とも稱して居ります、朝鮮の蛭子先生から時々御研究上、川柳の日本刀につき御照會がありますが誠にうれしい事で研究は斯くありたきものと、乍陰敬意を表して居ります

（此項終）

一家揃つて朗かに!!　絶好の家庭讀物と大好評

川柳漫畫傑作集

谷脇素文・編畫

…決戰下日本の世態を描破し、人情の機微を穿つた名川柳漫畫の大集成、笑ひの中にピリッとくる諷刺教訓、獨特飄逸の筆に前線銃後躍如たり。之こそ家庭慰安となり、前線將士も大喜びの鄕土便りとなる絶好快適の書。

慰問袋には是非この一本を

定價一圓五十錢（送料十五錢）

和田邦坊著

世渡り問答

一圓二十錢（送料十五錢）

大日本雄辯會講談社・りあに店書

川協のページ

柳界展望

（和歌山陸軍病院慰問）

催

▼本社主催五月句會は二日午後六時御津八幡宮に於て開催▼松坂倶樂部麻生路郎川柳講座は三日十七日午後一時▼有恒倶樂部川柳講座は十四日廿八日午後五時開講▼阪大川柳會は廿五日午後四時▼警察病院川柳會は十二日午後四時▼川・雑尼崎支部五月句會は廿四日午後六時尼崎昭和荘に於て開催▼尼崎住友產報句會は十三日午後五時開催▼愛媛川柳社では四月十二日「川柳伊豫」三周年記念春の大會を又五月十四日には山本耕一路居に於て川・雑松山支部常會を開催▼川柳藏吟社（臺北）では五月十一日春季川柳大會を開催

消息

▼植山九天氏（不朽洞會員）は華中鐵道上海醫院へ榮轉された▼櫻川不水氏（不朽洞會員）は豫防藥の間違から病臥されてゐたそうであるが此程全快されたとのこと▼高田拘逸氏（不朽洞會員）は四月廿九日下關の多田市多樓氏（不朽洞會員）を訪問三時間餘歡談された、なほ川・雑三池染料支部主催の「大東亞川柳千句集」への投句締切は六月末日、句の內容は國策に沿ふ奉公川柳である事句集の頒價は未詳▼石曾根民郎氏（不朽洞會員）は令弟故武郎氏の百ケ日に際し版畫と短文の小冊子「みかへりの塔」を船布された橋本波夢造氏（不朽洞會員）は五月上旬北海道に趣かれ「末の子に似た聲がする北の旅」の句信があつた▼西田艸樂氏（不朽洞會員）の令孃は近く華燭の典を擧げられる由▲清水友帆氏（不朽洞會員）は五月初旬上京▼柴谷宰二郎氏（兵庫縣）が勤務されてゐた夕刊大阪新聞と大阪時事新報とが五月一日に合併「大阪新聞」と改題されたが氏は同社の繪畫部長となられた▼村上角堂氏（堺）は四月下旬から約半月京城へ轉かれた▼浪玲之介氏（不朽洞會員）は四月中旬上京、十七日には成田山に參詣され「ズー辯も居て千葉の里春永しの句を寄せられた▼濱田久米雄氏（不朽洞會員）は此程、廣島鐵道局運輸部貨物課へ轉勤された▼水谷竹莊氏（不朽洞會員）は今回大阪遞信病院の料理部長となられた▼津田麗月冠氏（京城）は商用で來阪、八日本社を訪問された▼宮尾しげを氏（東京）は五月十二日から十七日に亘り大阪十合百貨店五階畫廊に於て催された五月會日本畫展に多數出品された▼廣瀬恒太氏（大阪）は五月初旬日田市に躍省された▼庄萬よし氏（大阪）は今回の市會議員改選に際しては立候補を辭し大政翼贊、自治報國、特に翼贊文化運動に盡瘁される由▼鈴木石鹿氏（不朽洞會員）は五月十九日、朝鮮電極株式會社へ赴任のため京城へ向はれた▼井口蛙郎氏（大阪）は五月初旬、大連三越支店次長に榮轉された▼森半疊氏は四月廿五日山海關の長城亞に秦皇島の港を觀光され賓館では中野柳楊氏と十餘年振りに歡談された▼川柳誌「伊豫」は今回通卷八十四號を以て「八幡船」と改題された▼米本貴志子さん（不朽洞會員）は五月以來健康を害されてゐられる由、一日も早く御快癒を祈る▼今川榎影氏（愛媛縣）は今回最高點で同縣大洲町の町會議員に當選された、今後の御活躍を祈る▼戸田孤蓬氏（不朽洞會員）は教育事業に盡瘁されてゐるかたはら氏の研究物に日夜沒頭されてゐる▼和田默然人氏（北京）は六月初旬歸鄉されるとの報に接した▼市場沒食子氏（不朽洞會員）は尾崎方正氏（不朽洞會員）の斡旋で近く創立される善の遞信病院川柳會の幹事役として水谷竹莊氏（不朽洞會員）等と協力される由▼永田里十九氏（不朽洞會員）は盲腸手術後いまだに通院されてゐるが酷暑を迎へないうちに全治されん事を祈る▼篠山籌彦氏（不朽洞會員）から元氣で頑張つてゐるとのお便りに接した、こまぐ〜としたためられた氏の卽吟には精進のあとがありぐ〜と見えた。

改號

▼木下誠治氏（大阪）は柳號を幽王と命名された

正誤

▼前號四頁下段廿三行目は「散る花の姿心經やどるなり」と訂正

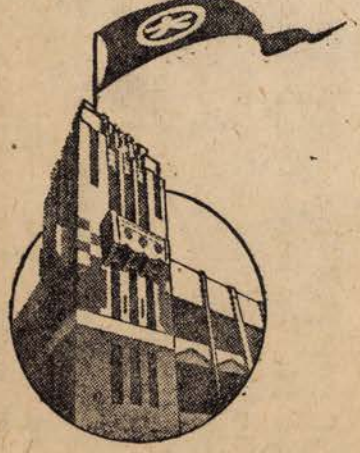
社の回覽板

★川・雑本社句會の案內名簿を目下整理中であるが出席御希望の方で未だお知らせのなき方は住所姓名、雅號を註記の上川柳雜誌社內句會案內係宛に申込まれたい

★不朽洞會へ入會を希望される方は會員の紹介により申込まれたい

寫眞說明

後列右より　登山　美記　酔馬　鑛雷　帆市
三十六　青果　玲竹林　柳糸　漫歩師
中列右より　鶴象　雪夢　蛇坊　白柳子　路郎
大槻子　中仙
前列右より　一角　早苗　美象　放海兒　紳風
水京　鈴波



戰時下物資配給の機關として品質、値段、品揃へに機能の萬全を期してをります

大丸

月曜休業

大阪心斎橋

募集句

一路集

釘　艸樂選

抜けさうで抜けない釘をもてあまし　吟平
凍結令と云ふ御勝手な釘を打ち　臥牛
音ばかり立てゝ素人の釘曲り　鐘生
釘の錆洗濯物へ鮮やかに　可學
引掛けた袖うらめしい釘の先　猪三郎
かんじんの所で釘が横へ外れ　彌生
暗轉で舞臺のかはる釘の音　葉光
古釘のもう一息でまた曲り　翠光
釘づくめ故郷の小包屆いたり　行春
釘の音のこの音素人らしい音　三丸
手術後へ博士笑つて釘を見せ　敏郎
懷手露路の釘へひつかける　詩朗
炊事場の釘それ〴〵の役をもち　世志一
曲馬團釘も殘さず引揚げる　千斗
釘不足靴屋遊んでも居れず　照次
五寸釘打つて一服する構へ　清富
空箱をこはすは釘に用があり　東狂子
言譯は罷りならない釘をさし　同
一本の釘日曜の響する　治男
釘を抜く妻の力のほゝ笑まし　同
(人)釘を打つやはり女としての音　青々子
(地)氣短の何やら云うて釘を抜き　勝司
(天)親方に默つて釘を拾はれる　葉光
(軸)北邊は中立という釘が利き　艸樂

獨身　市多樓選

獨身の理由を問へば笑ふだけ　清富
獨身はやつぱり危いものにされ　勝司
喰ひ過ぎたなどゝ病んでる獨り者　軒史呂
獨身は嘘とズボンの折目指し　神風
修道女御身等は國策しつてゝか　六龍子
今日も亦犬を相手に獨り者　零餘子
獨り者離緣の話聞いて居る　營實
獨身の野望連絡船にゆれ　弘樓
獨身のいつかヒスつた聲になり　カズヱ
獨身へ寂しく暮れる窓硝子　蘭京
二次會へ獨身だけの顏が寄り　敏郎
獨身で居る氣輕さに酒も呑み　詩朗
獨身者だから急がぬ廻り道　哲志
獨身の淋しさ母が知つてくれ　笑風
何の苦もない顏で來る獨り者　一角
未亡人その身赤十字に捧げ　世志一
軍神となる日へ獨身つゞけらる　鯛好坊
獨身者らしい疊に嵩む埃　猪三郎
獨身も嬉し近所の子に好かれ　波人
ネクタイの好み獨身ともみえず　翠光
案外に用事の多い獨り者　鐘生
もう四十まだ〳〵嫁を探すらし　正柳
獨身論母氣まかせにすると言ふ　柴田
洗濯をどつさりためて獨り者　品枝
獨身稅もう結婚をすると決め　青々子
獨身でいて常會の名辯士　蘭童
十六燭の下で獨身針を持ち　春
殉國の道獨身へ眞ッ直い　不川
今日からは獨身でない靴の艶　鷄城
獨身稅理論の餘地はなけれども　臥牛
獨身かそうかと社長氣のり薄　沒食子
獨身の筈だに婦人科へ通ひ　同
獨身の寢床まるめたまゝで出る　千斗
獨身の衣料切符を持ち歩き　彌生
養子はつらい獨身だつた日を思ひ　抱逸
獨身と名刺はすつてなれども　鷄城
駄目ですと家族席から斷られ　晴夫
獨身稅含ませてない下宿料　鯛好坊
獨身者曰く世間がうるさいと　道朗
從七位勳八等のひとりもの　千狂子
獨身は獨身酒は酒の味　祥月
獨身で一生過すとは言はず　潮流
獨身の氣樂さ鍋のまんま喰ひ　三丸
獨身の氣樂さ後も向かず征く　駒志希
獨身を易者見て來たやうに言ふ　福太郎
カルモチン呑んで獨身寢てしまい　沒食子
偉人にして獨身と云ふヒットラー　彌生
勝鬪も涙も自分だけのもの　一將

新發賣

消炎鎭痛濕布藥

粉末エキホス

主治効能　感冒、肺炎、肋膜炎
氣管支炎、扁桃腺炎、中耳炎
ロイマチス、神經痛、打撲痛
捻挫等

今般エキホス姉妹品として發賣したる本劑は專らその藥効並に持續時間の永續に留意して製造せるものにして用法も至極簡便、安全なる粉末濕布藥なり

一、本劑は長時間使用出來るやうに工夫してありますから持續時間は任意にして支差へありません

包裝
100瓦
200瓦
500瓦
壹瓩

エキホス姉妹品

C-PE19

同舟近詠

松山　前田五健

英靈の列へすまない春の旅
勞働のよさは風あり清水あり
無遠慮へアット云はせた唐辛子
あれからは便りはないと畑を打ち
つばめフト電線からの急降下
水ひきのピンと刎ねたるよい日柄
蝶々の氣まぐれ箒へ塵取へ

某月某日の出來事

空襲へ子は頼もしく箒を持ち
敵機來襲蜂の來たくらひ
警戒解除朝のラジオはラッパの音

惜春　金澤　安川久留美

象牙箸孕み鰯の腹突かず

仁川　池田可宵

老骨と言はず南の任に就き
建設の中を洋車が走つてる
大豆の芽税關構内とは知らず
水槽に水ありそして琴が鳴る

兵庫縣御影町　長崎柳秀

新妻を奥さんと呼ぶ面白さ
ひとり者些細なことに氣が尖り
見晴もサービスですと宿のもの
爪はじきされてゝもよい金をため
朗らかな悲鳴水鐵砲をよけ

神戸　潮田明坊

恩給の身の朝からの謠本
恩給になつて眩しい日に起きる
恩給があり大口で笑ふなり

敵機初空襲

敵機來左もあらばあれ食べはじめ

奈良縣龍田町　嶋田翠峯

農繁期戀もへちまもあるものか
勝敗を超越したる初名乘り
袖口を合はすは若い頃のこと
妻死んで衣料切符はそのまんま

長野縣須坂町　高峰柳兒

緊張をさせる重役室の咳
髪染めて職域奉公まだ續け
停年へ社運も時局に惠ぐまれず
机、椅子、老舗世辭なく構へたり
組長の立場としての地圖を貼り

山口縣　三原狂路

提げて見て餘りに輕きヒョコの死
花が散るからとて春の詩もできず
牛乳を靜に飲んで妻若し

今治　長野文庫

憶面もなく成金の立候補
消極を世は分別があると云ふ
行列へあきんど一寸ヒスの型
干支なく迷ふ男が未だ迷ひ

名古屋　鈴木可香

生花へまだ矢絣がよく似合ひ
極道のこと畑打つて忘れんか

急性・慢性
化膿症
丹毒・濕疹・瘭疽
外傷化膿・乳腺炎
扁桃腺炎・中耳炎
蓄膿症・齒槽膿瘍
急性・慢性 トラホーム
急性・慢性 淋疾
化膿性 婦人科疾患
…等に對し本劑は内服により化膿菌克服作用を發揮す。從つて、止膿・止痛・解熱を迅速ならしめ、根元的なる治癒を促進せしむ。又、副作用少く應用は安全、容易である。
製造元
山之内製藥株式會社
東京市日本橋區小舟町二
大阪市東區高麗橋五
OPIO
アルミパルファ錠
内服短期奏效・病原療法劑
二〇錠
五〇錠
一〇〇錠

七號室雜記

○

近ごろ、ある派の人たちの句がまるで標語のやうな句になつて、川柳をつくつてゐるのか、標語や提灯持ちの句に終始してゐるのか判らないと思ひますがあれでいゝのでせうかと七號室をたゝきに來る人があるが、私はその人たちに、

君よ。川柳をつくれ。いのちある句をつくれ。標語をつくる人たちには標語をつくらしておけ。常識人の世界には標語が睡眠劑の一ト役を果すのだ。私は近ごろ、佛像のまなざしのなみなみならぬひかりに永久といふものを敎へられてゐる。川柳もそこまで行かねばならないのではないか。雜草は棄てゝおいてもはびこるが、いつまで經つても雜草である。雜草と雜草でないものゝ見分けは誰にでも判かる。案ずる勿れである。世の中を盲千人だと思つてる人はその人自身が盲なのだ。私たちはそうした盲になることをおそれなければならない。雜草は雜草の中で背くらべをしてゐればいゝのだ。私たちはわざ〳〵雜草の中へ立ちまじつて、優越感を感じる必要はない。そんなことを考へるやうではまだホントに灰汁が抜け切つてゐぬ證據だと思つて、一段と精進を要する。と答へることにしてゐる。

○

存在するといふことはそう難しいことではない。雜草となつても、存在はする。

それに反して、眞に生きるといふことは難しいことである。いついかなる時に、死に直面するか知れない。長崎丸の船長は斷の一字で永生したではないか。偉いと思ふ。私たちも、いつなんどき斷の一字に、ぶつからねばならないかも知れない。その時が來るまでは精進しなければならぬ。雜草となつての存在を斷じて避けねばならない。

○

櫻の花となつて、ランマンと咲きみだれて、どうだ美しいだらう。早く見に來て私がいかに美しいかを知つてくれと宣傳してゐるやうな人生は私の好ましからぬ人生である。

雨のあしたの、泥まみれになつた落花はあまりにも寂びしい存在ではないか。

それよりも、私はシャボテンの凡庸さを愛する。何んにも言はずに、坐りこくつてゐるやうな仙人掌には、こちらから談しかけてやりたいやうな氣もちがするのである。私の人生はシャボテンのそれであることがのぞましい。

○

前田五健氏は「川柳にあらはれた日本刀」を、榎田竹林氏はそこらあたりから、ちぎつきり節の聞えてきそうな寫眞川柳一句を寄せられた。

○

私は忙しい中から「大和篇」と「初等川柳講座」の續きをものした。「首相と微行」もかいた。久しぶりの月評にも參加した。

○

福田山雨樓、小山文三、和泉生、奥村丹路、長野文庫の諸氏の雜文を一ト纒めにして、「る・う・ふ・が・あ・で・ん」に收めた。少しく目さきを變へて見たまでで別に他意はない。

○

同じものを澤山ならべると、そこに別の美が生れるものだ。本號の表紙（福井哲氏撮影）はそこをねらつたものらしい。私たちのこどもの時分には夜店に斯うした籠を賣る店が出てゐた。その籠の一つ一つに「ぶみ」とか「はな」とか「はる」とか云ふやうな、極くありふれた女姓の名が赤く刻まれてあつたことを記憶する。この表紙からそうした想ひ出が湧くこともうれしい。

○

日露戰爭のころ、八千代、政彌、お染の大阪三美人の繪はがきが戰地慰問用として、飛ぶやうに賣れたそうだ。近ごろの慰問品は少し堅すぎるきらひがあるのではあるまいか。尤も軟かすぎてもこまるが。

世間のことはなんでも中庸が無事であるらしい。どつちへかたむいても、どつかから不平の聲が洩れるものだ。

○

不朽洞會員も北に南に、御奉公の實をあげてゐられるので、お蔭で私も大きな顔がしてゐられる。有難いことである。軍務以外にも段々大きな動きのあることが豫想せられる。九天氏が長崎から又上海へ移つた。石鹿氏が京城へ移つた。今に仕事の中心地が大阪から、上海か香港あたりへ移るのではあるまいか。

○

アメリカも油の手がとまつては、今後動きがとれまい。お互ひの油は川柳だ。油の切れぬやう適度の活用を忘ないことがのぞましい。

（路郎生）

麻生路郎著
新川柳評釋
本筋の川柳で一粒選りの名句を蒐め、その一句一句に、不即不離の評釋がしてある。
定價〒 〇・八〇 〇・〇八

石曾根民郎著・麻生路郎序
句集 大空
著者は信州の人。心の底にじつと懷いてゐたものを素直に吐き出したといふ個人句集。
定價〒 一・〇〇 〇・〇〇

麻生路郎著・柴谷宰舟畫
累卵の遊び
名句に名評釋がしてあり、類例となる句が澤山蒐めてある漫畫三十二葉挿入。
定價〒 一・〇〇 〇・一二

阪大川柳會編纂・麻生路郎序
句集 大川端
大阪帝國大學部醫學部の阪大川柳會が編纂した會員の傑作集
定價〒 一・〇〇 〇・〇八

發行所 堺市出島海岸通二丁一八二 不朽洞 振替大阪三〇三九二番

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿清規▼用紙は原稿用紙▼文字を正確に▼開催月日及場所記入▼締切は毎月廿五日▼投稿先は本社宛

本社五月例會

五月二日　於　御津八幡宮

五月二日午後六時御津八幡宮に於て五月例會が開催された早くより出席者が續々とつめかけた。當夜の出席者數の過半は若手で占めて居た。しかも適齢前後といふ年輩であるので會場の景氣も生々として居た。久しぶりに里十九氏の顔も見えた。路郎師の柳話は國語を中心として大阪辯に說き及ぼし川柳での表現字餌は如何に扱ふべきかに付き興味ある小話をまぜて話された。閉會は例月より三十分ばかり早かつた。これは時局下を考慮されたもので、今後も九時閉會を斷行することとなつた。（幹事）

出席者（順不同）

路郎・軒史呂・一也・甲斐郎・三郎・行春・治男・鮎美・湖心・翠芳・雅美・絲雨・美奈子・千斗・不二・紫香・恒明・文雄・萬的・誠治・延枝・丹路・翠光・指洋・害興史・默平・里十九・博也・水客・彊生・鋭々・詩郎・映二・かほる・鳴玉・一笑・竹莊・綠葉・吐空・霞乃・アート

席題「子澤山」　互選

子澤山　服の破れも何のその　行春
乘つてから　點呼をしてる　子澤山　不二
踏切で　數よんで　見る　子澤山　紫香
子澤山　夫婦で分けて　風呂へ入れ　一笑
子澤山　みるみる夜が　明けてくる　甲斐郎
辨當が　大中小と　子澤山　三郎
お隣へ　今日も詫びて　子澤山　恒明
空襲に　みんな役ある　子澤山　甲斐郎
子澤山　みんな捧げる　氣で育て　美奈子

席題「終　點」　滿潮選

終點の　待合分讓地が　見える　萬的
終點で　バスはゆつくり　向を變へ　水客
終點の　驛長停年　後を思ひ　誠治
終點で　見る時の人　影がなし　鮎美
終點の　近くで席を　讓られる　一笑
終點に　近く切符を　確める　默平
終點へ　來てもやつぱり　降つてゐる　不二
終點の　隅で木炭　バスの煙　紫香
編物は　終點と云ふ　手の動き　默平
終點で　まだその一人　揃はない　害興史
終點へ　一人殘つた　赤郷　博也
終點へ　電車は輕い　音で付き　翠光
終點の　驛で勤務する　誇　一也
終點と　言ふ東京へ　着きにけり　鳴玉
終點へ　ドスンと電車　止るなり　不二
終點へ　慌てる要もなく　押され　翠光
終點で　起されてゐる　モーニング　湖心
終點が　近く車掌も　腰を掛け　恒明
終點で　降りてとにかく　喫付ける　千斗
終點で　男の愚痴を　聽いてやり　滿潮

席題「後　任」　鋭々選

後任の　演說口調が　もうはやり　三郎
今度來た　男と後任　呼ばれてる　誠治
後任に　推されて無事な　日を送り　翠光
ビヤホール　後任も　又いける口　かほる
後任に　ロッパのやうな　主任來る　一也
三等で　來た後任へ　寫眞班　滿潮
後任は　ユーモリストな　鼻下のひげ　博也
後任は　柔道五段で　やつてくる　綠葉
後任は　先づ給仕から　話かけ　誠治
後任は　手を拔く事も　教へられ　滿潮
後任の　噂をしてる　晝休み　萬的
後任は　社長の甥と　言ふ噂　翠芳
後任の　君待ち給へ　とは寂し　千斗
後任は　賞分ホテル　住居で來　鮎美
後任は　紫香　默平
後任の　若さタイピストが　驚ぎ　翠光
後任へ　芽の出た畑が　殘される　千斗
後任の　意氣うなづいて　印を押し　鮎美
後任の　眼鏡光る也　鋭々

兼題「鼻　唄」　鮎美選

鼻唄で　仕上げた嵩の　中にゐる　千斗
鼻唄を　寂しきものと　誰がしろ　綠葉
鼻唄で　洗ふ鮮の　水光る　吐空
鼻唄へ　チョロチョロ犬が　ついて來る　紫香
鼻唄が　姑さんの氣に　さはり　一笑
鼻唄に　合はす女工の　手の動き　翠芳
鼻唄で　出來る仕事へ　雲も飛ぶ　萬的
鼻唄で　まぎれる程の　悲しみさ　水客
鼻唄で　暮れる春の日　春の雲　同
鼻唄の　橋の向ふに　虹が出て　綠葉
靴のリズムに　和する鼻唄　映二
鼻唄が　自炊の湯氣ともつれたり　千斗
煙突の　上の鼻唄　霞む也　鋭々
鼻唄で　こりや珍らしい　友が來る　恒明
鼻唄で　退院準備　進められ　小城子
鼻唄に　なれば昔から　の君　萬的
鼻唄へ　向ふも窓を　開けてくる　かほる
麥のみち　鼻唄　蒼く消えてゆく　史郎
はちまきの　鼻唄　心太が　好き　鮎美

兼題「教　室」　路郎選

あの窓の　こつちが僕の　教室さ　恒明
將軍も　出た教室の　壁の傷　博也
立たされる　日の教室が　明るすぎ　害興史
教室の　後から見る子の　頭　滿潮
今も桃が　咲く教室の　故郷　鋭々
女教員　教室へ花を　活け　紫香
教室で　見た子の意氣地を　母はいひ　軒史呂
起たされた　窓の櫻が　眞盛り　綠葉
教室の　外でダリヤが　もえてゐる　害興史
教室へ　來れば先生　老いてゐ子　萬的
教室に　ある先生の　ユートピア　鮎美
想ひ出の教室　今日は親として　雅美
教室を　護るバケツの　水も春　滿潮
教室は　露天アイウエオも　覺へ　美奈子
教室へ　僕の作つた　花が咲く　綠葉
教室で　習つた事も　役に立ち　水客
鯉のぼり　見える教室　開け放ち　文雄
殉國を　說く教室は　靜かなり　滿潮
教室に　町會長も　低い椅子　默平
法醫學教室に　居てきられる　小城子
教室を　先生　遺れた樣に出る　萬的
教室へ　遺ふもとの唄が　聞へて來　水客
教室に　三十一の處女となる　鳴玉

雑川 梅田支部句會（大阪）

四月二十二日夜　於櫻橋アサヒ軒　鮎美報

畔柳黒光君歓送句會

畔さんよ　健在なれと　祈るのみ　駿二
御時世の　聲で送られ　さみたつ　勇一
赤襷かけて　初めて　それと知り　同
柳友を　句作で送る　清らかさ　行春
柳壇の　御大征きて　我さびし　三郎
丸刈を　ひやかされつつ　黒光征く　紀川
柳檜野營の　夢に滿たせかし　同
爆弾を　だまつて　抱いて征く男　桑坊
丸刈にも　敵の意氣を見せ　三司
畔柳芽をふく頃に　君は征き　吐空
召され　征く君の姿の　尊さよ　治男
先輩を　尻目にかけて　召れ征く　同
丸刈の　ペン執る腕を　銃にかへ　同
丸刈へ　なるほど　十年若返り　綠葉
丸刈の　黒光を皆んな　取圍み　鮎美
ビールビール　泡かきれいな　祝宴の灯　同
友と　酔ふ　この一時を　忘れまい　黒光
一億が　友情に生きる　國強き　同
隣組　空襲なんぞ　試驗ずみ　駿二
空襲の　さなかに君は　召され征く　勇一
空襲と云ふのに　ペンをとつてゐる　行春
空襲を　演習のような　氣で迎へ　三郎
空襲下　足袋干す　軒を　燕ぬけ　同
空襲下　山に向つて　深呼吸　鮎美
前線の　兵に空襲　知らすまい　治男
空襲へ　夕陽ぶんわり　沈みゆき　綠葉
アメリカの　豆まきに　來た年男　紀川
空襲を　した米國が　おぢけづき　黒光

雑川 大阪鐵道病院川柳會（大阪）

五月二日　於　近江分室　春巣報

竹藪を　微風寂しい　音で過ぎ　嘯川
そよ風は　夕餉の酒に　味を添へ　恒夫
療養の　人とスキートビーへ　風　某人
ネクタイへ　微風が見えるハイキング　春巣
快ニュースラジオと地圖に　顔が寄り　一雄
壁の地圖　今日も日の丸　數を増し　元夫
地圖にない　道を來られて　貰けるなり　恒夫
南線何度　東經何度　日章旗　嘯川
世界地理　教へて　吳れる大戰果　同
南方の　地圖にくはしい　樂天家　春巣
占領の　島本州と　見比べる　同
意地悪な　話にあきた　長火鉢　同
初對面　もう喰ひ意地の　話なり　同
何糞と　云ふ眼を　旦那　見逃さず　某人
分家から　きつぱり物を　返しに來　同

雑川 尼崎支部句會（尼崎）

四月三十日　於昭和荘　美知夫報

特配の　酒が殘つて　父は病み　毬夫
特配の　鮭から　隣保もめが　出來　同
特配へ　お金はものを　云はぬなり　同
特配を　にぎつて出した　遠足日　八櫻
特配の　肉へ長屋の　夜が來る　寄輿史
特配の　酒と砂糖を　ゆずり合ひ　同
特配の　炭が四月の　聲にふれ　同
特配を　子供にかくす　五六日　鮎美
徴用令　現場で受けて　あつけなし　寄輿史
産報の　マーク　徴用工若し　同
削職は　笑つて言はぬ　徴用令　同
徴用の　友と下宿の　灯に語り　毬夫
若死の　話後　妻の事に　ふれ　鮎美
若死の　部屋に帽子は　掛けたまま　寄輿史
岡村和郎氏の靈に捧ぐ　鮎美
若死へ　庭の　櫻は　眞盛り　同
若死の　通夜に淋しい　婚約者　毬夫

雑川 下關支部句會（下關）

半休報

電話でもしますと　其處は濁しとき　市多樓
入れ智慧の　聲も聞える　子の電話　井蛙
濟みません　とは交換　うまく逃げ　つたえ
電話する　女　春めく　眉もてり　潮流
言ひ貧けても　手應へのない受話機　不川
電話室　また言ひ足らぬように出る　草路
もう一ぺん電話の　返事風呂へ聞き　市多樓
今日からは　捕虜なり　枕高う寝る　不川
全機無事　捕虜　成程　なと思ひ　望月坊
捕虜日　これで妻子が　居れば好し　潮流
捕虜にして見れば　可愛いい男なり　米三
食料が　氣になつて來る　捕虜の數　麻路
汗々唯　建設へ　玉の汗　光輝
建設に　護國の　花と　知る勇士　薫風
砲音に　代る建設　鎚の音　米三
建設が　出來て港の　灯がともり　同
男の子　歩調も　父へ　揃へてゐ　市多樓
褒められて　擦すつて起きる男の子　井蛙
張替の　三日と持てぬ　男の子　同
軍神の　話　男の子は　並び　市多樓
屑鐵も　二度の御役に　召し出され　鯛好坊
古釘を　一本　大事に　拾つてき　哲志
木製へ　鐵棚　不平なく　替り　不川
鐵屑の　目方へアルミ　貨で拂ひ　麻路
鐵屑の　山へ　坊やの　古ナイフ　井蛙

雑川 岡山支部句會（岡山）

四月二十五日　於禁酒會館　九坡報

落下傘下界は　春だなと思ひ　九坡
落下傘　十半の靴へ　くたびれる　鶏城
天下る　空想も　今は落下傘　曉聲
落下傘　土人のおがむ　中へ降り　灯竿
落下傘故郷へよく似たとこへ落ち　町紅
銃聲一發　世界歴史が　變へられる　九坡
機關銃の音は　ニュースで覺えて來　同
第二乙銃が　重たい　兵でした　灯竿
銃眼へ　今日は死ぬべき　眼で覗き　同
米英に　日曜があり　銃が　鎖び　鶏城
春風も　悲しく捕虜の　群が行く　九坡
奥座敷　旦那一人を　捕虜にする　おぼろ
捕虜ばかり　見なれて明日へ　銃磨く　笛六
日の丸の　街を淋しい　捕虜の列　灯竿
捕虜となる身へも　握手がかはされる　同
カメラ買つて　此處は要塞地だと知り　鶏城
財産の　中の一つにある　カメラ　笑風
うつるぞと云へば　近くの兒等は逃げ　灯竿
藝術寫眞　これはたしかに　私です　笛六
カメラマン　敵の屍體にけつまづき　同
カメラもう　動かぬものは撮りつくし　同
手間の要るカメラへあやす　種がきれ　鶏城
カメラの　手柄母さんを　若く撮り　同
噶國の　兒が足りない　カメラなり　灯竿

雑川 小郡支部句會（山口縣）

井蛙報

春雷へ　花見の客は　みんな立ち　曉露
櫻咲く　日本今や　印度洋　一生
傳統の　國威を　誇る御所櫻　喜樂
遺家族として　の誇りに生き抜かん　多吾作
殊勲甲　遺兒は立派に　育つてゐ　半休
腹立てて　見れば相手は　遺族なり　市多樓
戰つて　來た血　敵の血　自分の血　同
籠の血を　洗つて市場　仕舞ひなり　半休
凱旋の　土産に　殘す　鼻のひげ　ひらた
この　髭の　手前列へも　並ばれず　井蛙
軍事便　ひげの便りで　長くなり　曉露
ちよび髭を　生やした譯を　子に問はれ　一正
つけ髭も　半分落ちる　浪花節　柳坡
物凄い髭も　交つて歸還兵　游記
降伏兵　しばし氣樂な　日がつゞき　市多樓
豪語した　昨日を忘れ　手をあげる　井蛙
降伏をして　日本の　正義知り　一生
義務だけは　果しましたと　降伏し　恒生

雑川 四ツ橋支部句會（大阪）

四月十四日　翠芳報

陷落に　水が呑みたい　ばかりなり　綠雨

彈丸になる債券を買つて來る　翠芳
駈足で彈丸下を通り拔け　朗舟
訓練のお蔭駈足負けてゐず　秀甫
駈足と自轉車すみれの道を行く　美奈子
駈足にだんだん列が亂れて來　綠雨
駈足へ閣下の聲が小さすぎ　白峯
駈足でカメラも來てる勝ち戰　同
辛抱へ櫻も咲いた便りが來　同
辛抱の猛訓練が大戰果　いづみ
辛抱をせよと母から又手紙　茶目坊
辛抱をする氣の弟子へきびしすぎ　美奈子
辛抱をして下さいと泣きつかれ　同
辛抱ももう之れ迄と立ち上り　翠溪
辛抱をせよと小言が二度三度　同
舞臺今人形と思へる身のこなし　美奈子
人形よケースの中で淋しかろ　夢想
人形へ母に言ほれたことを云ひ　綠雨
人形の席も設けた花蓮　芦穗

川雜

三池染料支部句會（大牟田）

五月一日　於　早鐘講堂　蝶人報

キャッチだけ揃はぬ待合所の不安　坂口
異人夫婦待合ふ人の眼をあつめ　抱逸
月掛の旅へ待合所の騷き　同
待合所半島辯も混つて居　同
午後十時來るか來ぬかのバスを待ち　同
列外にされて二汽車待つつもり　京美
一列で掏摸も困つた待合所　一葉
井戸堀りが石油層を堀りあてる　藤樓
緣談へ思はぬ素情耳にする　抱逸
駈けつけたホーム電車はあともみず　龜水
終電車車掌に客もねむそう　梅春
待合所今朝も時計の螺旋を卷き　波人
村葬へ意外な人の顏もみえ　平人
市電車の漫々的に腹を立て　抱逸
生きものゝやうに魚雷はまつしぐら　路村
海風に與市は弓を取直し　京美
命中を祈つて魚雷發射する　梅春
命中へ島は二三度舞ふて落ち　國夫
命中の聲普閣の底できき　同

川雜

仁多支部句會（島根縣）

四月廿六日　於　奏柳居　一聲報

元就の矢は協力を敎へたり　丶滴
榮あれ祖國よさらば輸送船　美晴
協力のかげに宣撫の功があり　源平
部隊長慰問の仁丹分けてやり　貞之
輸送船今日も決意の兵を乘せ　梅笑
募集した保險に母の邪魔があり　盛雀
招待券母は涙で受けて居る　一花
一匙に今日の砂糖の役があり　雲嶺
上陸の輸送船へ向き捧銃　榮川
輸送船覺悟の出來た願許り　早苗
注射器へ冗談云へる熱となり　雅舟
悠々と席へ通つた招待券　龜甲
スイッチを切らず病後の目を閉ちる　史朗
酒砂糖夫婦に別な道があり　同
特配の砂糖へ今日は嬉しい日　奏柳
スイッチを切つて舞臺の夜にする　同
カンフルへもう末の子も着く時間　一聲
鉛付けた狹へ姉はまだ若し　同
混雜も嬉し大捷告知板　同
木の芽さへ食ふ時世たり何不足　同

川雜

神津支部句會（大阪）

三月廿八日　於　嶺泉居　香林坊報

引越して一年名刺貼つたまま　香林坊
ごまかしたつもり表札寓と書き　同
俺のマスク女房のマスク色をかへ　同
留守番へラヂオの線が切れてゐた　同
マタハリによく似た眼なのあのマスク　伊太古
座り込み居留守はかれて承知して　同
マックアーサー留守を賴まれ飛ん逃げ　同
兵隊のマスクが白い霜の朝　若榮
表札に變り無けれど鴻の池　同
表札の木の香嬉しい新世帶　嶺泉
肩たたくマスクの人に面くらひ　同
やす物のラヂオはマスクかけたやう　湖心
表札に大臣の名あり裏長屋　同
棟割りの表札少し大きすぎ　一甫
留守宅へとどく戰地の初便り　同
應召の留守に嬉しい男の子　愚心
マスクして二つ三つ四つ若く見え　青洞
日曜日重いリュックに芋が見え　林笑
表札をかけてうれしい新世帶　一夢
忠魂の家の表札振り返り　紅天
組長になつて表札書なほし　山本

阪大川柳會（大阪）

四月十七日　利生報

見送りは時計を合はす發車ベル　春巢
風とうしアパート貳間高く云ひ　柳秀
眞白な襟飾輕く嫉視する　方正
隱居所に建てたを家主くどう云ひ　栞
花曇り毛の疊下を脫き棄てる　方正
一廻り若けりやジャバへ行く氣なり　利生
恐わ〳〵にきけばバスした御挨拶　たけを
お茶漬けでよかつたのにと里の母　柳秀
花屋呼ぶ子供の聲を足してやり　同
地ならしの横で重の一つ咲く　栞
氣安めの嘘も往診考へて　利生
魚の目を春の陽を背に削るなり　柳秀
猫背ふと親にすまない口をきき　利生
炬燵から猫背息子へ指圖する　方正
假縫ひへ猫背のことも附け加へ　利生
讀經の僧の猫背は殊勝めき　柳秀
氣やすめであつたかと女くやしがり　利生
墨色がよいと氣休め戻つて來　正甫
氣やすめももう効かぬほど痩せ行き　路生
人間の弱い心を鋼は知る　栞
あほらしい氣やすめなんかに乘ぜられ　柳秀
氣やすめで承知をせない歲となり　利生
氣休めに一杯飲めと引張られ　正甫
氣やすめを云ひに醫長は賴まれる　春巢
氣やすめの効かぬ患者をもてあまし　路生
年寄りの氣やすめとなる御呪　栞
孝行は氣やすめと云ふ金を見せ　柳秀
また氣やすめだつかと女とりあはず　利生
氣休めと知れて娘は泣きしやくり　一彌
氣やすめを云ひ〳〵さきに寢てしまひ　路生
親として氣やすめ計り云ふとれず　柳秀
氣やすめも重りや重患自をそらし　方正
氣やすめのテリヤ諸共盜られたり　栞
もう云ひなと氣やすめ叱られる　路生
よくねるを今にも驚るやうに云ひ　路郎
氣やすめを輕くうなづくいじらしさ　同
氣やすめと知つて病人眼をつむり　同
氣やすめにしんみりきかすとその例　同

松坂倶樂部川柳會（大阪）

五月三日　白面人報

チトどんな女中家中笑はせる　翠光
暇出してからの女中は惜しがられ　同
エプロンを取つて女中はみなほされ　同
兄と云ふ聲で女中にまた電話　白面人
若奥樣だけが女中にうけがよし　同
許婚女中を賞めて叱られる　同
行先の中に女中は嘘を混ぜ　同
休閑地女中の指揮で皆動き　雅美
藪入りに若奥樣の口を眞似　同
女中の荷女工哀史が滑り落ち　孤篷
嫉妬などしまいと女中決心し　同
賣る樣に云うと見物動き出し　聖司
相對性原理より說き胃散賣り　同
香具師の手にかかりゃ發明品になり　同
缺點があるので問屋香具師に賣り　雅美
買うたけど香具師の口上ほどきかず　同
考現學の一章香具師の事にふれ　孤篷
神懸りの樣に眼が眼が香具師の眼が　同
云ひ負けてきたの香具師の前に立ち　美奈子
ローマンスカー娘の横があいてゐた　翠光
大望の初手は車掌であつたそな　同
二階から電車が見える借家なり　美奈子

有恒倶樂部川柳會（大阪）

四月二十三日　鋭々報

燗冷めを溫めながら帶立て　青美
「見上東海の」と女中掃いてゐる　同

驚を驚かすまい竹帯　鋭々
帯持つたことなく娘お興入　同
一日は帯を入れぬ落花也　同
半分も言へずにヒスはばづんでる　青美
ヒステリと言はれまいそヒスつてる　同
ヒスを押へるのに切符五十點　鋭々
ヒスの後ハンドバッグがあんなとこ　同
映画から帰る道からヒスり出し　同
柳眉逆立つへバイブのまま默し　同
ハンドバッグ言へらくヒスは損です　同
一としきりヒスり宵寝をして了ひ　同
僕も僕もとヒスられた談也　同
ヒスる顔一度鏡で見て御覽　同
そりやヒスも無理ないわよと炎暑つづき　同
來合せた客へもヒスの飛ばつちり　同
あはれ男十年のヒスによくも耐え　同
譬ふれば瓦斯火の如しヒスの熱　同
飲んでゐる間はヒスの事忘れ　同
ヒスが恐いのかマメな旅便り　同
敏腕もそのヒステリをこなし兼ね　同
ヒス漸くおさまり化粧瓶の音　同

徐州川柳會（徐州）

四月二十九日　於　清交　ひろし報

何もかも電撃的な一ヶ年　鶴城
一ヶ年傷一つなく銃をとり　玉人
海外へ行きたい實の夢ばかり　八筋樓
鯉のぼり垂れて戰地の父思ひ　華木
鯉のぼり連れて出た子に教へられ　寛延
大陸の空吹き流す鯉のぼり　ひろし
鯉のぼり空の青さへ生きてゐる　雨町
増産に舊體制がつきまとひ　三草
増産に年を忘れた尻からげ　雨町
カーテンの水色もよし初夏の店　ひろし
賑やかな街に見つける夏姿　寛延

非特異性全免疫元
オムニンコツメト
本剤は非特異免疫學説に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。
（適應症抜粋）
流感、各種肺炎、肋（膜）膜炎、扁桃腺炎、中耳炎、蓋膿腫、其他各科、急性、熱性、炎衝性、傳染性、敗血性、並に化膿性諸疾患に對し廣汎に渉り著効を奏す。
（特長）
注射無痛、副作用絶無、用法簡單、奏効迅速、價格至廉。
（包装）
三〇〇〇瓶入
三〇〇〇管入
一〇〇〇瓶入
一〇〇〇管入
發賣元　株式會社黒田藥品商會
大阪・東京
—文獻贈呈—

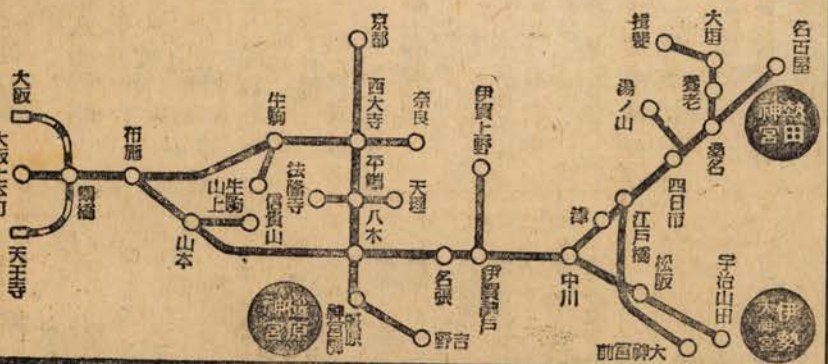
敬神崇祖　心身錬成　重要交通路

伊勢大神宮、熱田神宮、橿原神宮、神武天皇御陵をはじめ奉り數多くの御陵墓、枚岡神社、奈良春日神社、石上神宮、大和神社、大神神社、吉野神宮、丹生川上神社（上・中・下社）、談山神社等の官幣社ほか御由緒深き神社への光榮ある參拝路であります

神武天皇大和御平定の聖蹟をはじめ、飛鳥奈良朝時代の文化を物語る遺蹟下りては吉野朝幾多忠忠の史蹟、奈良吉野、多武峯、室生寺、赤目四十八瀧、香落渓、養老等の名勝に一般向鍛練道場としてのハイキングコースがあります

信貴生駒縦走、枚岡公園—生駒山上遊河泉展望コース、平城史蹟めぐり、飛鳥史蹟めぐり、多武峯より石舞臺・岡寺へ、三輪より石上神宮・天理へ、赤目四十八瀧より香落渓へ、その他奈良、吉野、生駒山脈を中心として數多くの優秀コースがあります

大軌と參急電鐵とが合併して全營業路線に四三八粁、これに直營バス及傍系の電車バスを加ふる時は一千粁を超え、大阪、奈良、三重、愛知、岐阜の一府四縣に跨り交通産業に緊密な關係を有する重要な任務を擔うてゐます



関西急行鐵道
（旧名大軌・參急電鐵）

社關係の人々

主幹

麻生路郎

賛助員

池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　笠原路生　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　長岡半太郎　長野晴濱　藤村作　藤本卯之助　頴原退蔵　浅田一　末弘巖太郎

客員

鳥山一歩　沖野岩三郎　大島蕭明　大谷五花村　鵜井晟修　川村花菱　米村あん馬　田村孝之介　谷脇素文　高尾亮雄　生方敏郎　窪田銀波楼　山本雨迷　安川久留美　前田五健　柴谷宰二郎　篠原春雨　蛭子省二　藤里好古　森東魚　小畑自有浪　古川風竹　前山北海　古川麗花麗　岩崎山石　藤井友郎　米本貫志子　内藤草一郎　三輪晩翠　水谷鮎美　大坂形水　田中雨月　平佐平三　橋本波夢造　藤岡至藝瑠　西川青美　黒川紫香　丸尾潮花　岩橋双虎　岡田某人　岩崎松代　酒井斗風　北川春巣　高田抱逸　月原宵明　矢野赫堂　鈴木石鹿　夷一笑　植山九天　石原伯峯

不朽洞會員

橋本緑雨　高橋かほる　福田山雨楼　西田艸樂　永田里十九　奥村丹路　寺井鋭々　岩崎柳路　大西八歩　高澤一浪　戸田孤篷　石井白面人　川出美根子　中島生々庵　戸倉曽天

★

姫田夕鐘　村松夢裡　市場役食子　吉田水車　妹尾八九蕭　春元紀太　宮岡白峰　石曾根民郎　中西おさむ　原史風　正本水客　櫻川不水　田中風葉　押谷たけを　佐竹香附子　尾崎方正　布施筑川　篠山籌彦　國弘半休　岩崎水虹　阿萬萬的　谷小林文月　小川線風　闊根山彦　西尾栞　酒井美知夫　飯尾害與史　小川恒明　野口柳太　濱田久米雄　中原銑人　好崎申仙　浪玲之介　津路紅多呂　河野夜王　德永雅美　谷口緑葉　武部香林坊　上田翠光　河井湧三　井上一將　八竹正柳　明石柳次　水谷竹莊　魚住蕭潮　清水友帆　清水史路　清水白柳子　西川愁水　中内翠芳　多田市多樓　宮田賢次　大森風來子　鈴木九坡　逸見灯竿

支部と幹事

道頓堀支部（大阪）萬よし
函館支部（函館）晟修
梅田支部（大阪）鮎美
嬢川支部（島根）緑之助
鳥取支部（鳥取）鐵州
松山支部（松山）耕一路
天王寺支部（大阪）八九蕭
鶴町支部（大阪）双虎
御池橋支部（大阪）夢裡
松江支部（松江）將雄
大鐵局支部（大阪）柳太
西條支部（愛媛）英賀夫
城南支部（大阪）申仙
今治支部（今治）文庫
川雑光笑會（大阪）里十九
竹原支部（廣島）芳郎
廣島支部（廣島）久米雄
豐中支部（豐中）紫香
下關支部（下關）牛休
北鮮支部（羅津府）美笑
蒙彊支部（張家口）柳路
上海支部（中華）天作
鐵道病院支部（大阪）春巣
渚支部（大阪）湊万
四ッ橋支部（大阪）翠芳
布哇支部（布哇）麗花麗
堺支部（堺）角堂
岡山支部（岡山）九坡
尼崎支部（尼崎）美知夫
日和佐支部（德島縣）賢次
三池染料支部（大牟田）蝶人
大洲支部（愛媛縣）椋影
小郡支部（山口縣）井蛙
熊本支部（熊本）水源
仁多支部（島根縣）一聲
神津支部（大阪）香林坊
津山支部（津山）一將

募集

第十九卷 第八號課題

六月廿日締切（十句以內）

實印　須崎豆秋選
校長　西尾栞選

第十九卷 第九號課題

七月廿日締切（十句以內）

形見　高橋かほる選
易者　杉原大研子選

第十九卷 第十號課題

八月廿日締切（十句以內）

公用　福田山雨樓選
友情　水谷鮎美選

毎號募集（毎月五日締切）

近作柳樽（雜吟廿句）　麻生路郎選
川柳塔　麻生路郎選
同舟近詠
各地柳壇（會報）
文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の原稿紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る
▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。
▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事。
▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
▲書體はなるべく楷書（川柳雜誌原稿）と封筒に朱記の事。
▲締切は嚴守されたし。
▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

規格判B列5號

川柳雜誌

第十九卷第六號

毎月一回一日發行

定價

一冊　郵　金三〇錢
半ケ年・六冊　金一圓八十錢（送料一錢）
一ケ年・十二冊　金三圓六十錢（送料十二錢）

外國送本には海外郵送料實費の加算を乞ふ

御註文はすべて前金で願ひます。振替（大阪七五〇五〇）又は小爲替を御利用願ひます。御註文は何月號よりと御指示願ひます。轉居又は改號等の節は舊新併記の事。

昭和十七年五月廿五日印刷
昭和十七年六月一日發行

禁無斷轉載　本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

廣告　本誌廣告に御用の節は川柳雜誌社廣告部へ御一報下さいませう。

日本出版文化協會員番號　壹四〇八〇五壹

發行所　川柳雜誌社　大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地（昭和ビル）　振替（大阪）七五〇五〇　電話土佐堀　三三三三番　八一六四番

編輯兼發行人　麻生幸二郎　大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地

東京市神田區淺路町二丁目九番地
配給元　日本出版配給株式會社

★毎號、戰線の勇士に送られたい方は部隊名をお示しの上本社宛に御申込み下されば郵税を奉仕して直接發送致します。

送本者名　住所氏名

ガラス壜代用 紙容器

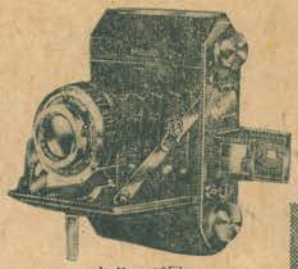
金屬代用紙罐
紙コップ

丸形・角形・小判形・組立式各種・藥品・食料品・菓子等の容器として最適

大阪市住吉區晴明通一丁目四〇番地
二葉屋商店
電話事務所用 天下茶屋 五八〇二番
工場用同 五八〇三番 五八〇四番

セミ・ミノルタ

代表的國産カメラ



ブロニー 16枚撮り
II型F4.5付 ¥117.00
F3.5付 ¥141.00
距離計 ¥21.00

(カタログ呈 要郵券十錢)

淺沼商會大阪支店
大阪市南區順慶町四丁目
電話船場905・1905・1396・5095番

東口 スピーザ

ワイシャツ
婦人服地
其の他

大阪市北浜二丁目 片倉ビル
電話北浜(23)六六三六番(4)

安産のために

妊娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

ワダカルシューム錠

大阪道修町 和田卯助商店

楢林醫學博士
片瀬醫學博士 推奬 監査

片瀬醫學博士述「安産のために」冊子呈上

SENRYU ZASSHI No・221
Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

細菌性・化膿性疾患に
テラポール錠

THERAPOL
TABLETS
テラポール
Each tablet contains 0.3g para
benzolsulfonamid.
DOSE: 1-2 tablets daily three
TRADE MARK
第一製薬株式會社

感冒・扁桃腺炎・中耳炎・尿路疾患・丹毒・肺炎・齒槽膿漏婦人科疾患・面疔・其の他細菌性疾患に